
魔法少女リリカルなのはStrikerS -Chronicle of Century-

伝説・改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers - Chronicle
of Century -

【Nコード】

N7409T

【作者名】

伝説・改

【あらすじ】

お気楽主義の自由人、ベレッタ・カークランド陸曹。

ある日彼は、機動六課への転属を言い渡される。

それは自らの過去、そして未来を切り開く戦いの始まりでもあった。

熱血魔法恋愛バトルガンアクションが今、舞い降りる！！

CHAPTER・0「序章」(前書き)

ベレッタ

「つつわけで、ようやくお役御免だな遼祐」

遼祐

「認めねえ！俺は絶対に認めねえ！！」

ベレッタ

「何本も主役抱えてたら辛いだろ？後は俺に任せて、お前はあのねーちゃんとゆっくり余生をのんびり過ごすこつたな」

遼祐

「くそつ、絶対に出てやるからな……！」（出ませんのでご安心を。彼の出番はここまです）

OPテーマ「NO MORE GAMES」歌：遊女
ゲーム『シークレットゲーム PORTABLE』OP

CHAPTER 0「序章」

いつまでも、どこまでも広がる空。
その空は、すがすがしいぐらい晴れていて、とても気持ちが安らぐものだった。

「……綺麗だなあ」

背中に当たる気持ちいい芝生の感触。
口にくわえた煙草。
まさに、彼にとっての樂園とでも言つべきか。

「……平和だなあ」

肌に当たる風は冷たすぎず、心地よい。
今にもこのまま、重たくなつた瞼が瞳を覆い尽くして、眠りにつき

そうだった。

だが、その瞬間だった。

『カークランド陸曹ッ！！』

耳元でもものすごい大きな声がした。

勢いよく起き上がり、青年は辺りを見回す。

と、自分の頭の横に電子モニターが表示されていた。

「なんだ、誰かと思えば俺の愛するオペレーターのラエルじゃないか」

『なんだじゃありませんよ！出勤命令出てるんですよ！？なに呑気に寝てるんですか！！』

相変わらず説教臭い奴だ。

そう呟きながら立ち上がり、尻をパンパンと叩き、背伸びをするがその間も説教は続いていたが青年はほとんど聞いていなかった。

「分かった分かった……で、なんだっけ？」

『分かってないじゃないですか！禁止区域内にある裏カジノを根城にしている指名手配グループが見つかったから行きなさいって命令です！！』

「ったく、それぐらい武装隊にやらせろよ……。なんでそんな危険な任務をしなきゃなんねえんだよ」

『私達がそういう部隊だからです！！とにかく、座標データを転送しますから向かってください！隊長ももうすぐ出勤しますから』

へいへいと、めんどくさそうに言うとポケットから何かを取りだす。
・44マグナム弾。彼が愛用しているデバイスの待機状態だった。

「んじゃ、行くか……」

《分かったわ、リーダー》

そしてその瞬間、彼の足もとから紅の魔法陣が浮かびあがった。

クラナガンの裏カジノ。

そこが彼らの現在の根城とでもいうべき場所だった。

クラナガンは基本、綺麗なイメージがあるが実際、それは一部地域。一部地域と言ってもそんなに狭いわけではないが、クラナガンの裏世界は全体の30%を占める割合だ。

違法カジノに風俗、そんなところいくらでもある様な場所だった。

そこをまたの名を、『禁止区域』と呼ぶ。

当然の様に、彼はそこを歩いていた。あくびをしながら。

「えっと、ここか」

《ええ。座標データは間違いなくここを示してる》

目の前には階段があり、そこを降りていくとやがて木製のドアが見

える。

そこを開いた瞬間、煙草臭い匂いが鼻についた。それと同時に、中にいるいかにも悪そうな男たちの視線が彼に集中した。

溜息をつき、パンパンと手を叩く。

「はいはい、管理局でえゝす。大人しく捕まってください」

いかにもやる気のなさそうな声だった。

それを聞くと、全員はゲラゲラと笑い始めた。

「おいおい、管理局はいつからこんなバ力を採用するぐらいおかしくなっちゃったんだ？」

「ひとりで来るとかwwwテラワロスwww」

「……やっぱこうだよなあ」

再び溜息をつき、頭を掻く。

いつもの事なので、正直気にしてない様だが、だが、彼らは違った。

男たちは質量兵器である銃やらなんやらを取りだした。

それを見て、またもなく溜息をつき、

「質量兵器の不正所持、公務執行妨害に殺人、おまけに違法賭博にその他諸々……。怖いもん知らずつつつか」

「うるせえ！いいからそこをどきやがれ！！」

「まあまあ落ち着けて。……そうだ、お前らにチャンスをやろう」

「チャンスだああ？」

男たちは疑問を抱いた顔をしていたが、彼は違った。
ここに来るまで、やる気のない顔をしていたがこの時、今までにな
い輝いた様な顔をしていた。

「そうさ、チャンス。どうせお前らこうやってカジノとかで儲けて
きたんだろ？いわば、お前らはギャンブラー。」

どうせ人生を生きるなんてギャンブルみたいなもんさ。なら、こ
こでもギャンブルでもしねえかって話さ」

「おもしれえ。それで、どのギャンブルをやるんだ？」

「そうだなあ……」

そう言いながら、辺りを見渡す。
と、目についたのはトランプ。

「……んじゃポーカーでもするか。お前らが勝てば逃げてもよし。
俺が勝ったらその場でお縄。どうよ？」

「ヒヒヒヒヒ……受けて立つぜえ。んじゃ、俺がやってやるう」

そう言って、でかいだけ取り柄そうな男が前に出てくる。

この時、この男には秘策があった。

この男は元々、勝負運がない。

だから常に懐にはイカサマセットを隠し持っていた。

それを知っている仲間たちはあえて、この男が出た事に誰も文句を
言わなかった。

「んじゃ、そこ座れ。ああ、ここのカジノのディーラー？カード切
って」

そう言つて、裏カジノのディーラーらしき男にカードを切らせた。
そして、ポーカ―対決が始まつた。

「くそおおお……！！」

「もう諦めろよ……」

10戦10勝。

欠伸をしながら、負けを認めさせようとするが諦めようとしなかつ
た。

イカサマ男の勝利ではなく、彼の勝利だった。
イカサマなど、既に見破っていた。

「んじゃ、約束通りお縄ね。えっと、人数分の手錠ねえからバイ
ドな」

「……じゃねえ」

さっきまでうつむいていたイカサマ男が急に立ち上がった。
そして、その周りに仲間たちが駆け寄ってくる。

「冗談じゃねえ！！」

そう言つて、男は勢いよく立ちあがり、木製のテーブルを叩き、テーブルの上にあるランプやらが床に散らばる。だが、彼は驚きもしなかった。それどころか、またまた溜息をつき始めた。

「つたく、負けたんだから素直に認めろつて」

「ふざけんな！ここまで来て、捕まつてたまるかよ！！」

「……んじゃ、来い。俺に勝てば逃げれんだろ」

そう言つて、男は近くにあつた酒瓶を手に取り、思いっきり振り下ろす。

ガラスの割れる派手な音と共に、中に残っていた酒が辺りにちらばる。

だが、その酒瓶は無情にも彼には当たらなかった。

「なに……！？」

彼は振り下ろす瞬間に、木製のテーブルを盾にして、そのまま男にテーブルの脚を顔面に突き刺した。

だがそれが顔を貫く事はない。そうならないよう、力は抜いていた。しかし、男の巨大な体は吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

仲間たちが男を見る頃には、既にピクリとも動いていなかった。生きてはいる。気絶しているだけだった。

「て、てめえ！」

今度はナイフを振りかざし、突き刺そうとしてくるがそれを華麗に

かわし、腕を持って背負い投げ。

再び別の男がナイフで突進してくるがアッパーで吹き飛ばす。

「……おいおい、こんなんでよくもまあ人殺せたな、お前ら」

「う、嘘だろ……？」

残った奴らは既に戦意を失っていた。

彼に挑んできた男たちはみな、この中では強者の部類に入る者たちだった。

だがそれが意図も簡単にやられてしまうと、自分たちでは無理だと気付き、戦う気が無くなってしまうた。

「こ、この野郎……！」

その中の一人が、半ばやけくそで銃の引き金を引く。

弾丸が派手な音と共に彼に飛んでくるが、その弾丸は彼には届かなかった。

『半分になつて』彼の後ろの壁に食い込んだ。

半分になったのは、彼がとっさに奪い取った、気絶した男の一人が持っていたナイフを縦に持ち、それで切り裂いたから。

もはや、銃も効かないとなるとパニックに陥った男たちは、店の外に逃げ出した。

「あ、外に出ない方が……」

もう仲間がいるぞ。

そう続けるつもりだったが、時すでに遅し。

全員逃げ出していた。

だが、その数秒後に奴らの叫び声が、彼の耳に響いた。

「……まあ、いつか」

気絶した男の財布を探り始めた。

そして中から数枚ほど抜き取ると、脅えて腰を抜かしていたカジノの経営者にはいと渡す。

ただし、一部は懐に入れていたが。

「これ、あいつらの酒代と壊したテーブルの分な。まあ、意味ないかもしれねえけど」

どうせすぐ捕まるんだし。と付け加え、そのまま店を後にした。

「と、こいつ忘れるとこだった」

懐から、トランプの束を取り出し床に置いておく。

ディーラーはなんて奴だと言ったような目をしていた。が、彼は気にせず、

「毒を以て毒を制す、だよ。あ、このジョーカーの絵柄かけえな」

「……お前、いつたい……」

「ああ、俺？……『シークレット・ジョーカー』……って知ってるか？」

「シ、シークレット・ジョーカーってまさか、あの……！」

ディーラーは何かに気づいたような顔をするが、それを見る前に彼は店から立ち去っていた。

店にぽつんと取り残されたディーラーは座りこんだまま、彼と入れ替わりに店に入ってきた局員に連行されていった。

「御苦労だったな」

「疲れたっすよ、一か月ぐらい休みたいです」

外に出て、連行車両のすぐ外で隊長らしき人物と話していた。
いや、らしきではなく隊長だが。

「俺もそうしてやりたいが、出勤に遅れた分と好き放題に暴れた分の書類を書かないとな」

「……マジすか」

「マジだ。まあいいじゃないか、書類書くぐらい慣れてるだろ？
それと、お前にはこの後色々大事な話もあるしな」

「……大事な話？」

『時空管理局本局・禁止区域犯罪対策部隊』副隊長のベレッタ・カイランド陸曹は、ボロボロになった顔をしかめた。
これが、彼の新たな運命の始まりでもあった。

CHAPTER・0「序章」(後書き)

伝説

「お疲れベレッタ。そうそう、あいつはどっかへ消えていったよ
笑)」

ベレッタ

「後で謝れば出してやってもいいんじゃないか？」

伝説

「いやいや、土下座しても出さねえよ(笑)」

ベレッタ

「嫌な野郎だな、つたくよ……」

EDテーマ「明日を夢見て」歌：ZARD
アニメ「名探偵コナン」ED

登場人物・デバイス・用語解説

【登場人物紹介】

名前：ベレッタ・カークランド

詳細：本作の主人公。

軽い性格で常に冗談を飛ばすが、根はどん底のお人好しで困っている人を見ると助けてしまう。

基本的に敬語は使わず、制服も乱れている。

だが頭の回転は速く、高い洞察力を持っている。

裏世界では、彼の事は『シークレット・ジョーカー』という異名で呼ばれており、裏世界ではかなり有名な人物。表ではほとんど知られていない。

ヴィータとは非常に仲が悪く、喧嘩もよくするが何故か変な所で息が合い、戦闘時も抜群のコンビネーション……と語られている。本人たちは否定しているが。

魔導師ランクはA-で最大魔力は並の魔導師より低いらしい。だが射撃能力や近距離でのナイフの扱いはかなりのもの。

イメージCV：千葉進歩

『銀魂』近藤勲役

『戦場のヴァルキュリア』ウェルキン・ギウンター役

名前：グロック・チェンハード

詳細：『時空管理局本局・禁止区域犯罪対策部隊』部隊長。

局に勤めて20年のベテランで、その腕もかなりのもの。魔導師ランクはSS+。

口は悪いが、部下を大切にしている性格で信頼は厚い。

イメージCV：黒田崇矢

『デュラララ!!』サイモン・ブレジネフ役

『龍が如くシリーズ』桐生一馬役

名前：ラエル・ミリタリー

詳細：『時空管理局本局・禁止区域犯罪対策部隊』オペレーター。
同隊のアイドル的存在で、ファンも多い。

イメージCV：喜多村英梨

『BLOOD+』音無小夜役

『Angel Beats!』ユイ役

名前：ナイツ・アーマメント

詳細：無限書庫所属とされる管理局員。

ベレッタとは何か因縁があるようだが、詳細は不明。
ベレッタ同様、常に余裕を持った性格。酒が好物。

魔導師ランクはB+。

イメージCV：鈴木健一

『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』シン・

アスカ役

『仮面ライダー電王』リュウタロス役

名前：セルゲイ・トゥルーズ

詳細：元管理局所属の執務官。現在は私立探偵を営んでいる。

管理局に所属していた時は『ブレイク・ジャック』の異名を
持っていた。

イメージCV：山寺宏一

『龍が如くシリーズ』秋山駿役

『かいけつゾロリ』ゾロリ役

名前：スパーズ・マクタビッシュ

詳細：質量兵器などを販売している違法武器商人で、次元犯罪者。
スカリエッティと手を組んでいる。

イメージCV：中田譲治

『ケロロ軍曹』ギロロ伍長役

『Fate/stay night』言峰綺礼役

名前：ジュン・ガリルージュ

詳細：スパースに雇われたフリーの傭兵。

冷酷で人殺しを趣味とするが、どこか人間らしさがある人物。

イメージCV：神谷浩史

『Angel Beats!』音無結弦役

『荒川アンダーザブリッジ』リクルート役

【デバイス紹介】

使用デバイス：『レジスタンス』

詳細：アサルトライフル型のインテリジェントデバイス。女性AIで、待機状態は弾丸。

外見のイメージはM4A1。

冷静沈着で優秀なデバイスだが、それは戦闘や緊急時の時のみ。

それ以外では俗に言う『腐女子』と呼ばれる性格である。

コンバットナイフ型デバイス『ブラックオプス』と拳銃型デバイス『キラークイーン』を収納している。

キラークイーンの外見イメージはM1911A1。

どちらもAIは搭載されていない。

イメージCV：生天目仁美

『灼眼のシャナ』マージョリー・ドー役

『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』沙織・バジー

ナ役

使用デバイス：『バトルフィールド』

詳細：アサルトライフル型のインテリジェントデバイス。男性AIで、待機状態は弾丸。

外見のイメージはTAR-21。

また、リボルバー型のデバイス『バットカンパニー』を収納している。

無口で主人に誠実だがレジスタンスとは気が合わない様子。

イメージCV：安元洋貴

『BLEACH』茶渡泰虎役

『コール オブ デューティ ブラックオプス』グリ

ゴリー・ウィーヴァー役

使用デバイス：『メダルオナー』

詳細：サブマシンガン型のインテリジェントデバイス。女性AIで、待機状態は弾丸。

外見のイメージはUMP45。

イメージCV：竹達彩菜

『けいおん！』中野梓役

『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』高坂桐乃役

【用語解説】

『禁止区域』

詳細：クラナガンにある犯罪が最も多く発生している地域。

治安がいいとされるクラナガンだが、一部地域は治安がひどくそこを『禁止区域』と呼ぶ。

殺人、恐喝、窃盗など日常茶飯事に起こっている。

違法カジノに風俗も平気でぼんぼん建っている。

『時空管理局本局・禁止区域犯罪対策部隊』

詳細：本局直属の独立部隊で、主にクラナガンにある禁止区域で起こる犯罪を対処するために設立された部隊。

CHAPTER 1 - 1 「始まりと終わりの序曲」 (前書き)

記念すべき第一話！

だがしかし！ベレッタの事があんまり理解できない！

おかしい！とてもおかしい！

こんな一話で大丈夫か？

CHAPTER 1 - 1 「始まりと終わりの序曲」

「転属命令?」

時空管理局本局の片隅にあるのが、『禁止区域犯罪対策部隊』の部屋だった。

そのまた片隅にあるのが、部隊長室。ここでベレッタはふぬけた声を上げた。

大事な話があると言って連れてこられて、一発目からバカにしたような声で『転属しやがれ』。

急な転属命令。そんな事、まったく聞かされていなかったのに。

「で、どこに行けと?」

「最近できた……なんだ？機動二課だっけか？」

「アンタその歳でもうボケたのか。こりゃ残りの人生悪い事が――」

鼻先に禁止区域犯罪対策部隊部隊長――グロツク・チェンハードが愛用しているリボルバー型デバイスを突きつけられ、両手を上げて『嘘です』と意思表示するとデバイスを戻した。息をつき、話を戻す二人。

「機動六課だ、機動六課。そうだそうだ。そこに行ってもらおう。荷物まとめて明日にはいけるようにしろ」

「で、今度は『なんで』だ？」

なんで。

その言葉を発しながら、ベレッタの表情は真剣なものへと変わっていった。

それを聞くとグロツクは、おもむろに立ち上がり内ポケットから煙草を取り出す。

ベレッタは壁に貼ってある『禁煙』と書かれた紙を見るが知った事か、といったような顔で煙草の先端に火を付けた。つてか、どうせ自分もしてるか。

それを思い出すと自分も煙草を口にくわえた。火を付けようとライターを取ろうとすると、グロツクが火を差し出す。

「本末転倒、だな」

なにがだよ、と言いながら火をもらった。紫煙を吐くと、グロツクは話を続けた。

「……簡単に言えば、戦力増強と言ったところか」

「はあ？あの機動六課が？」

馬鹿げた話だ。何を考えてるんだこのおっさんは。

ベレッタは本気でそう思った。

機動六課とは、八神はやて二等陸佐が設立したミッドチルダの地上部隊。

レリック問題専門部隊という名目で設立し、それだけ聞くとただの一部隊にすぎない。

が、話はここからだ。

その中身は、常軌を逸していた。

まず部隊長の八神はやては、魔導師ランクはSS。

さらに分隊長である高町なのはは、『管理局のエース・オブ・エース』の異名を持つほどの実力。

もう一人、フェイト・T・ハラOWNも優秀な執務官で、二人ともS+。

これだけでも異常なうえ、さらに副隊長である八神ヴィータ、八神シグナムはそれぞれS-とAAA+。

さらに将来が期待できる新人4人、優秀なオペレーター陣、新型ヘリを優先的に配備するなど。

まさに『異常な部隊』であった。

そんなところに行つて、何をすればいいのだ。考えている間に事件は終わっているぞ。

ベレッタがそう言うと、グロツクは静かにうなづく。

「……って、なんでそんなに知ってるんだ」

「個人的に興味あったただけだよ」

つまらなさそうに、だが少し嬉しそうに言う。
そして、一息つく。

「で、『本当の目的』は？」

またも真剣な顔で尋ねる。

グロックは紫煙を吐き、煙草を指にはさむ。

「『プロフェーティン・シュリフテン』……知ってるか？」

「カリム・グラシアの稀少技能^{レアスキル}か？」

カリム・グラシア。

聖王教会教会騎士団騎士、及び時空管理局理事官としての役職を持つ管理局員。名目上でだが。

機動六課設立に尽力し、機動六課最大の後ろ盾でもある。

そんな彼女が持つ、レアスキル『プロフェーティン・シュリフテン』。

最短で半年、最長で数年先の未来を、詩文形式で書き出した預言書の作成を行う。

二つの月の魔力がうまく揃わないと発動できないため、ページの作成は年に一度しかできない。

だが大規模災害や大きな事件に関しての的中率は高く、管理局や教会からの信頼度は高い。

「それがどうかしたのか？」

「……管理局の壊滅。そう預言されていた」

それを聞くと、妙に落ち着いた様子でベレッタは紫煙を吐いた。

そして灰皿に煙草をこすりつけた。

「……そいつと六課へ行くのとの何の関係があるんだ」

「さあな、俺も正直そこまで分からねえ。あいつはそこまでしか言
つてねえ」

「肝心な事を喋らねえのはいつものこつたる。まあ、なんでもいい
さ。試験運営終了の一年後までだろ？」

ポケットに手をつっ込みながら壁にもたれかかる。
グロツクもたばこをもみ消し、再び席へと戻った。

「ああ……まあ、そういうことだ。ついでに歳上を敬う勉強でもし
てこい」

「ガキばっかだろうが」

「20のクソガキがよく言うぜ」

鼻で笑うと、ドアの方へ向かう。

グロツクは「待て」と言い、ベレッタの動きを止める。
溜息をつき、回れ右をして再びグロツクの方を向く。

「たまに様子を見に行くぞ」

「ヤクザと間違えられねえようにな」

手を振って、部屋を後にした。

部屋を出ると、すぐ横に黒髪の少女が立っていた。

ラエル・ミリタリー。この部隊のオペレーターで、アイドル的存在であった。

「どうした？愛する先輩が学校を卒業する日みたいな後輩の顔しやがって」

「……そんなじゃないです。ただ、あの部隊、上からは結構マウクされてるみたいで不安で……」

確かに、事実だった。

八神はやては優秀な局員だが、とある事件の当事者でもあった。ベレッタはその事件についてあまり詳しくないが、というよりどうでもよかった。

ただ、犯罪者が部隊長という事で、偏見を抱く者も少なくなかった。しかしそれより上層部は、もっと不安な事があった。

「機動六課が設立した本当の理由……」

「ええ、それがどんなものか分かりませんが、上からすればまずいことみたいです」

溜息をつき、髪をぼりぼりと掻く。

「まあ、なんでもいいさ。適当にやって帰ってくればいいんだ」

「……そうですね。じゃあ、気をつけてきてくださいね」

「行ってきますのキスとかないのか」

「今日の朝してきました。あなたになんかしませんよ」

……くそ、いいよな恋人持ち。

清々しいくらいの笑顔で言われて少しへこんだベレッタだったが、その場を立ち去ろうと回れ右をした。

「……死んだら、ダメですよ？」

「そんなに俺の事好きなのか」

「あなたの為じゃないです！……ティードさんの為です」

——逃げろ、ティード！

「……ああ」

表情が曇るが、すぐにいつもの気の抜けた様な顔に戻る。

「……んじゃ、行ってくるわ」

手を振って、その場を立ち去った。

その寂しそうな背中を、ラエルはただ静かに見つめていた。

しばらく本局をぶらぶらとしていると、人通りの少ない廊下でとある青年が壁にもたれて立っていた。

ベレッタはそれを見ながら、素通り。……とするつもりだったが。

「機動六課はいいとこだぞ？」

「……そうかよ」

その姿を見ないまま、後ろ向きの状態で会話を始めるベレッタ。青年はそれを気にする様子はまったくなかった。

「アンタが動くって事は、また何か派手な事が起こるって事だろ？」

「いつからそんな方程式が成り立ったんだ」

「はは、これは俺の自論だ。まあ、んな事はどうでもいいんだけどよ」

そう言うと、壁にもたれていた青年はベレッタが向く方とは反対の方を歩き始める。

そして、ベレッタもまた、歩き始める。

と、青年はふと歩くのを中断し、口を開く。

「知ってるかベレッタ？なんか俺たちの存在、レジアス中將がかぎ始めてるみたいだぜ？」

「……だからなんだよ、俺は早く煙草吸いたくてイライラしてんだ」

「気をつけな。機動六課の部隊長である八神はやての事、レジアスは嫌ってるらしくてさ。なぐんか、嫌な予感するぜ？」

「……気をつけるよ、アーマメント」

「ナイツって呼べよ。『同じ部署』の親友じゃねえか」

「いつ禁止区域隊と無限書庫が同じ部署になったんだ」

「……ま、なんにしろ気をつけな」

アーマメントと呼ばれた青年は、再び静かに歩きだす。

「……へたすりゃ、本当に死ぬぞ」

それを聞くと、ベレッタも

「ご忠告、どうも」

静かに歩きだした。

シークレット・ジョーカー。

直訳すると隠れた切り札。

その名の通り、隠れた切り札であるベレッタは裏世界ではかなり名の通った魔導師であった。

管理局の表の切り札は、エース・オブ・エースである高町なのはある。

が、ベレッタは裏の切り札。表ではあまりどころかほとんど公にされていいない。

そのおかげか、高町なのはほど、表では騒がれるような人間ではな

かった。

……いい意味で、だが。

実際、ベレッタ・カーランドという人種を毛嫌いする人間もかなりいた。

表の世界では上層部に。裏の世界では犯罪組織などに。

態度も悪い、口も悪い、顔は……悪くない。

だから余計に嫌いな人間もいるのだろうが。

「『エース』と『ジョーカー』……。あとキングとクイーンとジャックでもいればすげえんだけどな」

《世紀末レベルのパワーバランスになるじゃない》

駅のステーションで、電車が来るのを待っているベレッタと首からかけて銃の弾丸の形をしている愛用デバイスの『レジスタンス』。二人は電車で機動六課の隊舎へと向かうため、ここにいた。が、何やらダイヤが乱れている様子でこのままでは遅刻しそうだった。

《まあ、六課にはグロック隊長を通して連絡してるし、いいんじゃない？》

「ああ、そうだな……」

柱にもたれて、欠伸をする。

ベレッタにとって遅刻なんて、当たり前前の事なので対して気にしていなかった。

もっとも、転属初日なので流石に少しは焦っていたが。

「にしても、なんだって俺が機動六課に行くんだよ。管理局の崩壊

を止めるってなら、他の所でもいいんじゃないか？」

《さあ？確か機動六課って男が少ないからじゃない？……あ、もしかしたら男性同士の絡みを好む人がいるから……》

「また始まった……」

語らなくても分かるかもしれないが、このレジスタンスはデバイスとしては優秀（と周りは言っている。ベレッタは思っていない）だが、AIに問題があった。

意思を持つのがインテリジェントデバイスの特徴だが、このレジスタンスは特徴がありすぎて不思議だと周りは言っていた。（そこだけはベレッタは思っている）

例えば、イケメン局員同士が話をしているところを見るとハアハア……とか言っている。

《ちょっと何よ。人の楽しみにイチヤモンつけないでくれない？》

「イチヤモンつける気はねえ。だけど周りから引かれねえようにな」

実際引かれているが。

だが本人は気にしていない様子。

と、丁度その時。

《あ、リーダー。グロック隊長から通信よ？》

「ああ？おっさんから？実は転属なんてなかった、なんて言っなよ」

実際そんな事はない。

そっ思いながら、通信画面を開いた。

『おいベレッタ、やべえことになった』

「どうかしたのか？まさか転属はありませんとか？」

『ダイヤが乱れてる原因が判明した。リニアレールが襲撃されてる』

リニアレールが襲撃？誰に？時空テロリストか？
そう言うが、グロックは首を振る。

『どうやら、ガジェットみてえだ。しかもかなりの数だ』

「ガジェット……って事はまさか、リニアレールにレリックでも乗ってんのか？」

と、その直後に駅員二人がとなりを駆け抜けて行った。
白線ギリギリまで来ると、回れ右をして慌てた様子で、

「皆さま！危険ですので、出来るだけ離れてください！お願いします！危険な列車が通過いたします！」

それを言うと、周りの客はすぐさま白線からどんどん離れていく。
駅員もすぐさま離れていき、一応安全は確保されたが、まさかここを通るとは。

だが、それは同時にチャンスでもあった。
ベレッタは駅員に歩み寄る。

「管理局だけど、危険な車両って？」

「ああ、はい。ついさっき機動六課という部隊から連絡がありました」

て、駅を通過するので客を避難させてくださいと……」

機動六課か……。

こりゃ一足早くあの人らと会いそうだな。

「分かった。じゃ、客が怪我しねえように近づかせねえようにしとけ」

「あ、はい！」

そう言つて、白線の近くまで歩く。
すると、画面のグロックが溜息をつく。

『お前、まさか……』

「……危険なお客様にはご乗車を遠慮してもらわねえとな」

『……死ぬんじゃないぞ』

「あいよ」

通信を遮断し、レジスタンスを手を持つ。

当のレジスタンスまで、溜息をついていた。

《まったく、死ぬ気？》

「死ぬ？冗談よせ、死ぬ気なんざさらさらねえ」

——間もなく、2番乗り場に電車が参ります。危険ですので、白線の内側まで……—

アナウンスが聞こえ、ざわめき始めるホーム。
ベレッタはといういつもの表情で、デバイスを掲げる。

「……じゃあ、行こうぜ、相棒」

《……分かったわ、リーダー》

レジスタンスの返事が聞こえると、ベレッタはにやりとする。
そして次の瞬間、レジスタンスが光りはじめ、ベレッタの足元には
深紅の魔法陣が。

《スタンバイレディ、セットアップ》

瞬間、ベレッタの衣服が管理局の制服から黒色のロングコートで生成されたバリアジャケットへと変わった。

中には赤色のフード付きシャツ、藍色のジーンズと私服の様なデザインだが、ベレッタにはそれがしっくりきていた。

そして、右太ももに黒色のホルスターが装着され、そこには拳銃——M1911をモデルにしたアームデバイス。

腰には同じくアームデバイスの大型コンバットナイフが装着された。

最後に、手に付けたレーザーグローブに握られたアサルトライフル——M4カービンをモデルにしたレジスタンスが現れ、変身は完了。
そして丁度のタイミングで、リニアレールが現れた。

かなりのスピードだが、命知らずのベレッタにそんなもの関係なか

った。

リニアレールが目の前を通り過ぎると同時にホームを飛び越え、列車へとしがみついた。

「……す、すげえ」

駅員が敬語を忘れて、その早技にぽかんと口を開けていた。

一番後ろの車両に飛び移る事が出来たベレッタだが、問題はそこからだった。

かなりの数と聞いていたが、本当にたくさんいた。

流石にこの人数を一人で相手をするのは骨がいる作業だ。そう呟いた。

「……見過ごした方がよかったかもな」

《言わんこっちゃないじゃない。やった以上、責任とってもらおうよ》

「お前が言つとどうもあっち系に聞こえるな」

いつもの軽口。

レジスタンスはこれを聞いて安心した。

軽口を叩いている、つまりそれはベレッタが余裕を持っていると言う事。

ただ最近、どんな状況でも余裕を持ちすぎという場面に多く遭遇するが。

「……さてと、車両の中に入るか、屋根に上って一気に運転席制圧か」

事を早く済ませるなら、運転席制圧でコントロールを奪った方がいいだろう。

ただ、その場合中にあるレリックが心配だが。

「……中から行くか」

レリック守りながらの方がいいだろう。

そう決めたベレッタは、さっそくスライド式のドアを開き、車両内に入る。

中に入ると、そこにはガジェットがうようよ徘徊していた。

まだこっちには気づいていない様子だったので、ベレッタは無駄な戦闘は避けようとこっそりと歩く。

……が、ガジェットのAIも馬鹿ではなかった。

物陰に隠れているベレッタに気づくと、すぐさま目からビーム！を繰り出してきた。

「げ、見つかった！」

ビームを避けるが、数が多いので対処しきれない。

一発が腕をかすり、血がにじむが抑えている暇はない。

すぐさま応戦するため、壁に隠れてレジスタンスを構える。

《アサルトバレット》

紅色の魔力弾が連続で銃口から現れ、その魔力弾がガジェット製の鉄のボディを貫く。

ベレッタがいる車両の敵は全滅した。

こそこそいくつもりだったが、見つかった上にここまで暴れた以上、増援は現れるはず。

「どけえええええ！！このやろおお！！」

相棒の溜息も、銃声の響く車両で誰にも聞こえなかった。

ベレッタとレリックとガジェットを乗せた超危険なリニアールはそこを鬼神のごとく爆走していた。

操縦しているヴァイス・グランセニックは今、リニアレールに乗ったベレッタの事を考えていた。

「まさか、本当に乗り込むとはな……。相変わらず、バカなんだな」

あ、あいつ」

悪態をついているが、その表情はどこか嬉しそうだった。それに気づいたのか、その後ろにいたサイドテールの女性——高町なのはがヴァイスに声をかける。

「ヴァイス君、どうしたの？」

「ああ、なのはさん。リニアレールに乗り込んだ局員の事、聞いてますか？」

「うん、確か今日配属される予定だったベレッタ・カークランド陸曹だよね。どうかしたの？」

「……いえ、なんでもありません。それより、そろそろ降りた方がいんじゃないですか」

そう言うと、なのはは頷きハッチが開く。
なのはがピンク色の髪の少女——キャロ・ル・ルシエに何かを言っていた。

そこでヴァイスは、キャロが緊張している様な顔をしていたの思いつ出した。

あの様子では、その緊張を和らげているように見えた。

「……さてと、あいつが迷惑かけねえように祈っとくか」

友人がバカな事をしない様に祈りながら、ヘリのハッチを開いた。

そのバカな事をしないように願われているベレッタは、何か違和感を感じながら攻防を繰り返していた。

ガジェットの動きが敏感になっていくように感じた。

魔力弾を避けたり、フェイントをかけたりコンビネーションアタックをしてきたり。

動きが良くなつたように思えた。

《気のせい……って言いたいところだけど、多分誰かがコントロールしてるみたいね》

「コントロールしてんのかよ……。面倒なことになったなあ、おい！」

カートリッジを一発、消費する。

近年爆発的に普及しているカートリッジシステムは、例外なくレジスタンスも搭載していた。

しかし、一部だけ他のカートリッジと違うところがあった。

元々ベレッタの魔力最大値は、普通の魔導師より低かった。

そこで開発されたのが、『カートリッジシステム・カスタム』。

そのままナーミングだが、通常のカートリッジシステムの2倍の恩恵を受ける事が出来るのだ。

ちなみにこちらは一部のデバイスにしか搭載されていない。

《グレネードバレット、ファイア》

「喰らえ！！」

通常より大きな魔力弾を発射し、着弾と同時に爆発する。

激しい爆風で少しうろたえるが、そのままダッシュで次の車両へ。
だが、その直後。

《……ベレッタ、機動六課のお出ましまたいよ。通信が》

「誰からだ？」

《……八神はやて部隊長》

「うげえ……お説教か？」

《ま、覚悟してたんだから諦めなさい》

覚悟してたわけじゃないんだけどな。

そう呟きながら、通信を開く。

『ベレッタ・カークランド陸曹やね？機動六課の八神はやてや』

「まさかこんな形で挨拶するなんて……。で？用件は？」

『今、機動六課のスターズ分隊、及びライティング分隊が現場に向
かつとる。カークランド陸曹はそのまま車両制圧、そしてレリック
の保護をお願いしたいんやけど』

こいつ関西弁だったのか。

それは置いておき。

「でも、そっちの隊員の手も欲しいところだな。正直一人じゃきつ
い」

『分かった、分隊の方にはあたしから連絡しとく。カークランド陸曹は引き続き、列車を頼めるか?』

「了解」

通話終了。

さて、と呟きながらベレッタは考え込む。

やはりこのままではキリがない。

いつそのこと、自分はレリックの置かれている車両に直で行った方がいい。

そう思うと、すぐさま行動に移した。

魔力弾で屋根に穴を開け、魔力でできたワイヤーをレジスタンスの銃口から発射。

屋根に上り、ガジェットの数が一番多い車両へと走る。

「……と、向こうじゃもう始まってんのか」

列車から少し離れた所で、ピンク色の魔力と金色の魔力が見える。高町なのはとフェイト・T・ハラオウンの魔力光と同じ。つまり既に到着していると言う事。

「じゃ、こっちにも隊員が来るつつうことか」

『列車の屋根にいる局員、聞こえるか?』

と、直後念話が。

念話とは、魔導師同士が使えるテレパシーの様なものであり、魔導師が最初に覚える魔法でもある。

そして、ベレッタにはその声に聞きおぼえがあった。

「……お前、ヴァイスか!？」

『ああ、感動の再会は後にして、まずは新人そこに降ろすからどいてな』

別の所に降ろせよ、と言いたかったが我慢してその場を離れる。

近づいてきたヘリコプターのハッチが開き、そこから4人の魔導師が降りてきた。

4人と目線が合うと、ハチマキをした蒼色の髪の少女——スバル・ナカジマが、

「あの、ベレッタ・カークランド陸曹ですか？」

「ああ、そうだ。ホントは熱烈なハグで歓迎してもらいたかったがそりゃ後回しだな」

若干、4人が引いたように見えたのはベレッタの気のせいではなかった。

こんなので引いてたらこれからの人生生きていけないぞ。そう思ったが、あえて言わない事にした。

「……と、ふざけてる場合じゃ無かったな」

後ろを振り向くと、そこにはガジェットの大群が。

全員、デバイスを構えて戦闘態勢に。

「お前ら、隊長らにはどうしろって言われた？」

「列車の中に入って、レリックの安全を確保、ガジェットの撃墜です」

「オーケー、じゃあさっさと終わらせて残りの時間を俺の歓迎会の準備に廻しとくとうぜ」

そう言うと、スバルとオレンジ色の髪のツインテール少女——ティアナ・ランスターの二人は静かにうなづく。

残りの二人——エリオ・モンディヤルとキャロも頷いた。

さて、問題はベレッタだった。

見た感じ、彼女らが機動六課に配属された期待の新人フォワード部隊だろう。

という事は、彼女らだけでもここは任せれるはず。

あれだけ好き放題して後放置。なんて言うのは少しどうかと思うが、あえて任せてみるのも悪くない。

いや、でもここまでやったなら最後まで行くべきか。それにさっさと終わらせたい。

そんな気持ちが強かった。

「じゃあ行くか。とりあえず、俺はこのまま屋根からレリックのある車両に行つて取つて来てやつから、お前らは中に入ってガジェットを倒せ。いいな？」

「……はい！」「……」

「んじゃ、行くか」

そして、それぞれは行動に入る。

ベレッタは言った通り、そのまま列車の屋根からガジェットを倒しながらレリックが置かれている車両へと向かう。

「おい、ヴァイス！聞こえるか！？」

『なんだ！？』

ヴァイスに通信を開き、レリックの場所を教えてもらうことに。ベレッタはどこにレリックがあるのか知らなかった。

「レリックは何両目にある！？」

『7両目だ！』

「ありがとよ」

通信を切って、再び走る。

やがて、7両目の車両の屋根まで来ると魔力弾で屋根に穴を開け、そのまま中へと飛び込んだ。

そこにはレリックが入っているケースらしきものが置いてあり、それをガジェットが運ぼうとしていた。

「おいおい、ママから人のもの取っちゃだめでちゅよって教わらなかったかよ？」

そう言いながら、ガジェットを倒していく。

やがてケースを持ったガジェットを倒し、飛んできたケースを確保する。

「はい、終了」

そう言いたかった。

が、そうもいかなかった。

大きな足音がし、後ろを振り向くとそこには二回りほど大きなガジ

エイトがこっちに向かって歩いてきた。

「……おいおい、何食ったらそんなにでかくなるんだよ？」

機械なので大きくはならない。

だが、無意識で冗談を言ってしまうほどそれなりにベレッタは驚いていた。

その直後、スバルたちがこの車両に到着した。

「おい、誰でもいいからこれ持ってる！」

と言って、レリックの入ったケースを投げる。

拾ったのはスバルだったが、そんなもの見ていない。

ホルスターにしまつてある拳銃を取りだして、撃ちながら距離を縮めていく。

しかし、魔力弾は通らなかった。

「くそ、AMFか！」

AMF。通称、アンチ・マギリンク・フィールド。

効果範囲内の魔力結合を解いて魔法を無効化するAAAランクの高位防御魔法で、フィールド系に分類される。その効果範囲内では攻撃魔法どころか移動系魔法も妨害される。

つまり、ベレッタの魔力弾が通用しないと言う事。

「……だつたら」

腰からナイフのアームドデバイス——『ブラックオプス』を取り出し、投げつける。

AMFは魔力で結合されたものは通らない。

しかし、物質的なものに効果は無い。

つまり、物質であるナイフはAMFを……。

「ビンゴ！」

通過できる。

投げたナイフがガジェットのボディに突き刺さり、電流が走る。
AMFは無力化され、丸裸同然。

「手柄は譲ってやらあ！行け！」

ベレッタが叫ぶと同時に、スバルとエリオが飛び出してくる。

「デイバイン——」「一閃必中！メッサー——」

「バスター！」「アングリフ！」

列車内に、ガジェットが爆発した音と振動が響き渡った。

CHAPTER 1 - 1 「始まりと終わりの序曲」(後書き)

【次回予告】

ベレッタ「んじゃま、今日からよろしくな」

ナイツ「転属祝いにいい事教えてやるよ」

なのは「じゃあベレッタ君、お願いできる？」

フェイト「彼……ただ者じゃない」

ヴァイス「いつしよにどうだ？一杯」

はやて「教えてくれへんやろか？カークランド陸曹の目的」

ベレッタ「困ってる人を助ける。ただそれだけだ」

CHAPTER 1 - 2 「機動六課」 (前書き)

伝説

「次回予告ではタイトルが『働き思ひ出』になっていましたが、
機動六課』に変更いたします。すいませんでした」

ベレッタ

「一発目からやりやがった……」

CHAPTER 1 - 2 「機動六課」

「初出勤……だったのか」

六課の隊舎でヴァイスとベレッタは中にある喫煙室で会話をしていた。

二人の片手には煙草が握られており、ベレッタは灰を灰皿に落として、再び口にくわえた。

「ああ。初出勤にしちゃ、新人ども、よく頑張ってたと思うぜ？」

「それが仕事なんだから頑張んなきゃ飯食えねえだろ」

「相変わらずだな、お前……」

半ばあきれながらも、ヴァイスは友人との再会を喜んでいた。それはベレッタでもあった。

二人は訓練生時代からの親友であった。

とある共通点から仲がよくなり、今に至る訳だ。

「しかしまあ、なんだってこんな時期に転属なんだ？」

「……さあ、グロツクのおっさんからだと、戦力増強だってよ」

「グロツクのおやつさん、元気か？」

「ああ、元気すぎてこっちがおかしくなりそうだ」

グロツクは、ヴァイスにとってもベレッタにとっても親の様なものだった。

しかしベレッタはそんな事、思いたくないようだが。

「そっぴや、八神部隊長にはもう会ったのか？」

「ああ、まあな」

それは数分前に遡る。

「しっつれいしまゝす」

ふざけた態度で、部隊長室に入りこむベレッタ。

普通に考えたら確実に怒られるが、今回に至っては見逃してくれた。ただ、笑顔で「今度やったらお説教やで？」と言われた。

どこに行っても似た様な奴はいるもんだな、とどこぞの隊のオペレ

「ターを思い出していた。」

「ヘックション！」

「ラエル、風邪か？」

「あ、グロック隊長。多分そうかもしれません」

はやてが座る机の前まで来ると、はやては立ち上がり握手を求めた。

それをベレッタは一瞬驚いたが、すぐにこちらも手を差し伸べ握手に応じる事に。

「配属途中に任務をもらって、おおきにな」

「これが仕事さ。で、早速で悪いけど、俺は具体的にこの部隊でなにやればいいんだ？」

そう言う、はやてはうん、と言いながら立ち上がる。

そして近くにあるソファに座り、ベレッタも後に続くように座りこむ。

と、直後。

「それはわたしが説明するです〜！」

突如として現れた小さな妖精……ではないが、彼女——リインフォース？の登場に少し驚いた。

そしてしばらくその姿をジッと見た後、ベレッタはこんな事を言う。

「……なんだ、このちっこいの」

「むう！リインはこう見えても八神部隊長の補佐官なんです！」

「……またどつかで見た様な奴だな」

「ヘックション！」

「本当に大丈夫か？」

「大丈夫です、問題ありません」

まあまあ、とはやてが言うとおほんと咳払いするリイン。

「カークランド陸曹は、主に分隊長の補佐をしてもらうことになるです」

「雑用かよ」

「そうじゃなくて、具体的な補佐はこのリンや六課のみんながする事になるから、カーランド陸曹は任務時においての補佐やね」

「つまり、基本的にはフリーって事か」

「そういうことです。でも、新人4人の訓練に参加したり、書類仕事もお願いするですよ」

訓練……かあ。

ベレッタの苦手な物のひとつに訓練があった。
人に物を教えるのはあまり得意ではなかった。

「カーランド陸曹のデバイス、銃やったやろ？うちの新人にも銃を使う魔導師がおるから、教えてあげてほしいんや」

「へえ、同業者がいんのか。そいつ、なんて名前だ？」

「ティアナ・ランスターや」

……ランスター……？

ベレッタの背筋に、寒気が走ったような感じがした。
それと同時に、なんだか急に心が重くなった気がする。

「ん？どないしたんや？」

「あ、いや……」

まさか、『あいつ』の妹って……。

とりあえず、その事を保留して、ベレッタは何もなかったかのような素振りをする。

「まあ、それはいいとしてだ。

んじゃ、俺はアンタの直属の部下……って事でいいんだよな？」

「せやな。コールサインも、ロングアーチや」

「……分かった。それとだ」

「？」

「……カークランド陸曹はやめてくれ。堅苦しいんだ」

そついうと、はやては「ああ」と言った顔をする。

「分かった。それやったら……ベレッタ、でええやろか？」

「ああ、その方がしっくりくる。それじゃ、俺は失礼するぜ」

「了解や。……あ」

扉に近づこうとするベレッタを止めるはやて。
ベレッタははやての方に振り向く。

「……ベレッタ、前にあたしとどこかで会ったやろか？始めてやない様な気がするんやけど」

「ああ、そりゃきつと俺が有名人だからかもな」

「……ふふ、そうかもしれへんな」

くすくす笑いながら、笑顔でそう答えるはやて。

実際のところ、ベレッタもはやてと初めて会った気がしなかった。
どこかで、遠いどこかで会ったような。

そんな気がしていた。

「それじゃ」

「うん、御苦労さん」

「……ああ、そうだ」

「？」

「……俺も八神部隊長なんて堅苦しくて嫌だから、『はやて』って
呼ぶけど、いいか？」

「……ええよ、ベレッタ」

「おう、じゃあな」

そう言つて、ベレッタは部隊長室を後にした。

残されたはやてとリインは机に座り、窓から外を眺める。

「……ベレッタ、かあ」

「どうかしたですか？はやてちゃん」

「ううん、なんでもないよ。ほな、仕事再開。リイン、さっきの任
務のデータ、本局に送ってくれへんか？」

「はいです〜!」

そう言つて、リインも部隊長室を後にした。
はやては息をつき、立ち上がる。

「……ほんま、始めてつて気がせえへんわ」

ベレッタが着任して、1日が経つた。

ベレッタは今、訓練場であくびをしながら新人たちの到着を待っていた。

「朝っぱらから訓練か……、こりゃ俺の生活リズムが崩れるな」

《もともと崩れてるからいいんじゃない?》

「へいへい……と」

ベレッタは訓練場にやってきたなのはの方を向く。
傍までやってくると、なのはは笑顔で

「おはよう、ベレッタ君。昨日はまともに挨拶できなくてごめんね」
「気にすんな。どうせいつか嫌でもあいさつするんだから」

そういうと、なのははそうだねと言いながら同じく新人たちの到着を待つ。

やがて、新人4人が到着すると同時に整列させ、朝礼の様な事を始める。

「おはよう、みんな」

「「「「おはようございます！」「」「」」

「うん、みんな元気だね。じゃあ早速……って言いたいんだけど、まずは彼の紹介からかな」

そう言うと、なのははベレッタに視線を移す。

これはベレッタに自己紹介をしる、そう感じたベレッタは髪をポリポリ掻きながら前へと出る。

ごほんと咳払いをすると口を開き、

「えっと、まあ知ってるだろうけど一応もう一回しとくな。

昨日、『禁止区域犯罪対策部隊』から出向してきた、ベレッタ・カーランドだ。

で、こいつがデバイスのレジスタンス」

《よろしくね、みんな》

「俺も時々訓練見る事になった。んじゃ、今日からよろしくな」

「「「「はい！」「」「」」

「えっと、じゃあベレッタ君に質問とかあるかな？」

「おいおい、転校生みたいだな」

実際そうだけど、と付け加える。
と、スバルがはいはいと勢いよく手を上げる。

「じゃあスバル」

「えっと、レジスタンス……でしたよね？それってどんなデバイスなんですか？」

「ああ、見てみるか？」

そう言いながら、ベレッタはレジスタンスに機動を命じる。
そしてしばらくするとレジスタンスはアサルトライフルへと姿を変え、太ももにはキラークイーンが入ったホルスターが装着され、腰にもブラックオプスが装着された。
それを見たスバルとエリオとキャラは歓声をあげた。

「すごーい！銃なんですね！」

「ああ、俺の得意分野だからな」

「じゃあ、ティアといっしょだね！」

キャラがそう言つと、ティアナは、

「分かったから落ち着きなさい！」

彼女らにとってはいつものやりとりだった。

「じゃあ、今回の訓練、最後のメニュー、行こうか」

立体シミュレータで表現された廃墟のビルの上に立つのはは、下にいる新人4人にそう言う。

ベレッタは、なのはの横に立っていた。

今まで訓練をサボっていたせいかわ、結構息が上がっていた。

ただ、決してきつすぎるものではなかった。

ただ厳しいだけではなく、しっかりと基礎を大事にしている、そんな教え方だった。

「じゃあベレッタ君、お願いできる？」

「ああ、あれか。了解」

肩にレジスタンスを担ぐと、下を向いて4人の方を見る。

「今から俺と模擬戦だ。お前ら全員、俺に『一撃』でも打撃を与えればお前らの勝ち。」

ただし制限時間内に一撃を与えなかったら俺の勝ちでお前らの負け。どうだ？」

「べ、ベレッタさんを相手にですか！？」

「ああ、ま、適当にがんばってくれ」

エリオが声を上げるが、ベレッタはいかにもやる気のなさそうな声で答える。

隣にいたなのはが苦笑いするが、すぐにスバルたちの方を向く。

「おりゃあああああああ!!」

かなりの実力だった。スバルたちは、最初こそフィールドを武器に戦ったベレッタだったが、ティアナの適切な指示。

スバルの速攻、エリオの高速戦。キャロの支援と、チームワークが抜群だった。

動きも圧倒的にそこらの局員より素早い。

パワーも、スピードも、ディフェンスも、全てが整っていた。物陰に隠れ、戦略を考える。

逃げれば制限時間がきて勝てる。……が。

流石にそれではベレッタのプライドが許さなかった。

「……しゃあねえ。だったら見せてやろうじゃねえか」

『シークレット・ジョーカー』の意地って奴を。

真っ向から挑んでは数で負ける。

だが、上手くすればこちらが勝てる。

こういったギャンブルは、嫌いじゃない。むしろ大好物だ。

片手にレジスタンス、もう片手にキラークイーンを手取る。

そして……。

「おらあああああああああ!!」

本当に真っ向から、突っ込んでいった。

そして、負けた。

「あっけねえな」

夜、食堂ではつきりとヴァイスにそう言われるベレッタだったが、本人は気にせず食事を続けていた。

メニューはハンバーグにフライドポテトと人参、ライスにスープにサラダという夕食らしい夕食だった。

しばらく煙草を吸っていないため、かなり腹が減っていたベレッタは先ほど3杯めのライスをおかわりしたばかりだった。

「……お前、相変わらずよく食うよな」

「局に入ってから煙草吸えなくなったからな。なんか食うようになった」

「そうかよ。……で、本当は？」

ヴァイスのその言葉が出た瞬間、ベレッタは手に持っていたスープの入ったカップをテーブルに置く。

そして、息をつく。

「……半分ぐらい本気出した。それで負けた」

「なっさけねえ……、禁止区域隊の副隊長がそれでいいのかよ？」

「どうせ一時期だけの予定だったんだ。副隊長なんか伊達だよ」

そう言うと、空になったトレーを返却口へと戻す。

食堂を出ると、ヴァイスが一言。

「なあ、久しぶりにいつしよにどうだ？一杯」

「……ああ、いや、今日はやめとくぜ。なんか乗らねえや」

「……ならいいけどよ」

そう言つて、ヴァイスとベレッタは別れた。

ベレッタは自分の自室へ戻ろうとしたが、その途中。

《リーダー、通信》

「こんな時間に？よほどの常識知らず——だな」

画面には、『ナイツ・アーマメント』と書かれていた。

溜息をつきながら、通話を開く。

『ようベレッタ。どうだ？新部隊での日々は？』

「そこそこだな。少なくとも男ばかりの禁止区域隊とか武装隊よりはマシだ」

『そりゃそうだ、ははは。……なあ、転属祝いに『いい事』教えて

やるよ』

ベレッタの表情が少し曇り始める。

これは機嫌が悪くなつたのを意味していた。

「……なんだよ、『いい事』って」

『耳かっぱじって聞け。どうやらレジアスの野郎、本格的に俺たちを探り始めたみてえだ』

そして溜息をつくベレッタ。

その間に自室に入り、窓を開けて煙草をつける。

『おいおい、分かってんのかこの意味？』

「ああ、分かってるさ。だから余計に吸いてえんだよ」

『ニコ中が。まあ、いいけどよ。俺たちの素性はそう簡単にバレやしねえよ』

その表情には、どこか余裕ある態度が秘められていた。それを察したベレッタは、口を開く。

「そりやそうだ。そんな事ではれるんだったら、俺たちはとっくに終わってるさ」

『そんなとおりだ。……つと、スクライア司書長に呼ばれてんだ。んじゃ、失礼するぜ』

俺はたんなる暇潰しか。

そう思いながら、ベレッタは通信を切った。

「……とつくに終わってる、か」

ナイツはベレッタの言った言葉を復唱する。

司書長室へと歩きながら、色んな事を考えていた。
自分たちの事。

そして、『過去』の事。

「本当に終わっちまってんだけどな、俺ら」

そう言つて、目の前にある司書長室の扉をノックする。

中からどうぞという声が聞こえたと同時に、ナイツは中へと入った。

「失礼します、司書長」

「あ、ナイツさん。すいません、急に呼びだしちゃって」

椅子に座って待っていたのは、緑のスーツを身にまとった青年。

ユーノ・スクライア。無限書庫の司書長であり、学会でも有名な考古学者でもあった。

無限書庫とは、時空管理局最大のデータベースである。

「気にしないでください。後、敬語なんていいですよ」

「いや、ナイツさんの方が年上ですし……」

「でも俺の上司なんですから。……まあ、それはいいとして。何か用ですか？」

「あ、とりあえず座ってください。長くなりそうですから」

そう言われるがまま、ナイツはソファへと座る。

流石司書長室のソファ。休憩室のソファと比べ物にならないな、とナイツは思った。

「実は、今度ホテル・アグスタで開かれるオークションなんですけど……」

「どうかしたんですか？」

「もしよろしければ、ナイツさんもいっしょにどうですか、って思っただけですけど」

「そりゃ、なんでまた？」

たかが一司書であるナイツが、行事ごとに呼ばれるのは珍しい事だった。

しかも司書長と同伴。ますます珍しい。

「……実は——」

ユーノは真剣な顔つきで、語り始めた。

その話を聞き終わった頃には、ナイツは首を縦に振っていた。

夢を見ていた。

その夢の中のベレッタは、ただ黙って銃を撃っていた。

目の前に何かがいるわけでもなく。ただ引き金を引いていた。

叫んでいる。自分は。

だけど、その声は聞こえない。

何を叫んでいるのか、分からなかった。

そして、

「ベレッタ！逃げろ！！」

親友の、声。

聞こえたのは、これだけ。

「ッ！」

目が覚めたのは、その直後だった。

「……まったく、なんだってお前は何回も俺の夢の中に出てくるんだ……ティード」

次の日の朝、はやてはベレッタを朝一番に部隊長室に呼んだ。思いっきり寝起きのベレッタは、多少不機嫌だった。

「朝一番にごめんなあ、ベレッタ」

「んで？なんだよ用ってのは」

「……ひとつ、聞きたい事があるんや」

椅子から立ち上がり、真剣な顔つきでベレッタを見据える。ベレッタは、何か面倒な事を聞かれるな。そう直感した。

「……なんだよ？」

「失礼やと思ったんやけど、実はベレッタの事……調べさせてもらったんや」

「なんでまた？」

「武装隊、陸士106部隊、機動三課、1321航空隊、捜査課、禁止区域隊……。ここ6年の間に、これだけ異動があるのは……不自然や」

それを聞くと、ベレッタは溜息をつく。

「そりゃ、俺が問題児だからさ。」

勤務中に裏カジノで一発儲けたりすりゃ、飛ばされるだろ」

「それもあるみたいやけど、やつぱり変や。」

……教えてくれへんか？ベレッタがなんでここに目的」

「……簡単だよ」

それを言つと、はやては少し戸惑った表情をする。

「……困ってる人を助けてやりたい、ただそれだけさ」

「……ふふ」

はやては微笑み始める。

優しいそうな、何も裏がなさそうな笑み。

それを見てベレッタは口を開く。

「なんだよ？」

「うつん、ベレッタって……優しいんやな」

「優しい……か？」

「うん。あたし、ホントはベレッタのこと、苦手な人やったんや。言葉遣いも荒いし……」

「悪かったな」

「ええよ、もう。あたしもごめんな。勝手に調べたりして」

「よくあることだよ。異動した部隊の奴には、大抵調べられるんだよ。どんだけ信用できないんやら……」

溜息をつき、扉の方へと回れ右をする。

「あ、せやベレッタ」

「なんだ？」

「もうひとつ、聞きたいんやけど……」

ベレッタは再びはやての方を見る。

「……本局直属……いや、本局でもごく一部の人間しか知らへん、秘密の部隊があること……知ってへんか？」

それを聞くと、少しベレッタの口元がわずかに動く。
だが、

「……いや、知らねえけど？まさか俺がその部隊の人間……って、

言いたかったのか？」

「ううん、知らへんのやったら、ええよ。あ、せや。よかったら、朝ご飯、一緒にどうや？」

「ああ、いいぜ」

二人は部隊長室を後にした。

CHAPTER 1 - 2 「機動六課」 (後書き)

【次回予告】

はやて「出張任務に行く事になったから、ベレッタ、留守をお願いできへんやろか？」

ベレッタ「マジかよ……俺も行きたかったぜ……」

フェイト「こうやって話すのは、初めてだね」

ヴァイス「ところで、お前どこ行くんだ？」

グリフィス「ロストログアが出現しました。場所は……」

ベレッタ「まさか、こんなところで会えるなんてよ」

セルゲイ「……そうだな、カークランド」

CHAPTER 1 - 3 「鉄槌の騎士と出張任務と」

クラナガンの中にある、禁止区域。

その中にあるとあるバーで、ベレッタは酒を飲んでいた。ちなみに今は真昼間。つまり勤務時間。つまり規則違反。立派な書類もの。

だが本人にとって、こんな事は日常茶飯事だった。それでも、十分やばい事ではあるが。

だが、今日はただ暇潰しという訳ではなかった。

カランと、バーの扉が開き、扉についている鈴が鳴る。そこからひとりの男が入ってきた。

青年というには歳を食っている。かと言って初老の男性ではなく、30半ばと言った見た目の男が入ってきた。

「久しぶりだな、セルゲイ」

「……そうだな、カークランド」

セルゲイ・トゥルーザ。

時空管理局の執務官だったが、現在探偵稼業を営んでいる。

「それで、今回は何の用だ？」

「ちょっくら、頼まれてほしい事があってよ」

ベレッタは隣の席に置いていた、茶色い封筒を手に取り、セルゲイの目の前に置く。

その様子を目で追っていたセルゲイは、その間に煙草を手に取り、先端に日をつけた。

「……なんだ、これは」

「頼まれた事が以外に詮索はしない方がいいぞ。なんせ、管理局のトップシークレットなんだからな」

そう言うと、セルゲイは溜息をつき、マスターに酒を頼む。

「そう溜息つくなんての。依頼料は今回の酒代って事でどうだ」

「……わざわざマグマに浸かりに行くような事を、俺はするつもりはない」

「そう言うなって。な？頼むよ。この通り」

「……どの通りだ」

ベレッタはただ何もせずにウィンクしながら頼むだけだった。

再びセルゲイは溜息をつき、煙草を灰皿へと押しこむと丁度運ばれてきた酒の入ったグラスを手取る。
と、それをベレッタの方へと向ける。

「……………いいのか？」

「……………俺が危険だと分かれば、すぐにやめるぞ」

「流石、『ブレイク・ジャック』だな」

「……………その異名はもう捨てた。今はただの探偵だ」

そう言うと、ベレッタもグラスを持ち、セルゲイの掲げたグラスに当てる。

カチンとガラスのぶつかる音がすると、二人は酒を口へと運んだ。

ベレッタが六課の隊舎へと帰ってきたのは、夕方だった。

セルゲイと飲んだ後、裏カジノで一発やって（ちなみに勝った）、気がつけばこんな時間になっていた。

「やべえなあ……………、確実にはやてに言われるな。ま、なんとかするか」

だが、その希望はすぐに打ち切られることとなった。

はやてに怒られたわけではないが、別の人間に怒られることとなった。

ベレッタが隊舎の入口へと歩いていると、入口の前に誰かが立って

いた。

「……あれって、もしかして」

間違いない。

ベレッタは忘れるわけがなかった。

ガキみたいな体格。

口が悪く、何かと突っかかってくる態度。

そして、手に持っているハンマー。

「……ヴィータじゃん、何やってんだこんな所で。ほらほら、もう暗いからお子様はおうちへ——」

「ラケーテンハンマー!!」

激しい爆発音。

舞い上がる煙。

何事かと、次々と六課の職員がその現場へとやってくる。

「デメエ!こんな時間までどこほつつき歩いていやがったんだ!!」

「バーロー！パトロールだよ！」

「そんな指令、出てねえだろー!!」

煙が晴れると、そこにはハンマーをブラックオプスで受け止めているベレッタの姿がった、

あの一瞬で、デバイスを起動し、ブラックオプスを取り出していた。

「おいおい、俺たちは市民の安全を守るんだぞ？だったらこうやってパトロールを——」

「うるせえええええー!!」

そしてその後、かけつけたなのはに止められた。

ちなみに、デイベインバスターが飛んできたわけでもないし、スターライトブレイカーも飛んできてない。

……ベレッタとヴィータの記憶が、正しければ。

ただ二人は、ピンク色の閃光が見えた。それだけ言っていた。

「……ヴィータ、あかんやろ？いくらなんでもアイゼンを使ったら」

「だって——」

「ベレッタもや。こんな時間まで勤務をほつといたらあかんやろ」

「だって——」

「だってやないっ！」

「「ヒイ！」」

部隊長室で、二人は正座させられてはやてに説教を受けていた。

その後、一時間ほど説教を受けて二人ともなんとか始末書と反省文を書くだけで済まされた。

……ラッキーだな、お前ら。

「ラッキーじゃねえ！！こっちは死ぬとこだったんだぞ！？」

そりゃそうだけど。

だがそんな事はどうでもいい、重要な事じゃないぞ、ベレッタ。

「やかましい！！」

「……誰と会話してんだ、お前」

「……おほん。いいからさっさと書けクソガキ」

「ガキじゃねえ！あたしはヴィータだ！」

「分かったよ、いいから書けバータ」

「ギニ。ー特選隊じゃねえ！！」

ベレッタは溜息をつきながら、ポチポチと書類を書いていた。

二人は俗に言う『犬猿の仲』と言うのにふさわしいほどの仲だった。ベレッタの多数の配属先の中に、ヴィータが所属していた『本局航空隊第1321部隊』があった。

そこで二人は始めて知り合ったのだが、何せ上官であるヴィータに何かと突っかかるベレッタに、ヴィータは『嫌な奴』という印象しかなかった。

おまけに任務中も言う事を聞かずに突っ込んだり、時々逃げて後よろしく的な事をするもんだから、流石のヴィータも腹が立った。で、部隊での模擬戦で二人が戦った時、ここで二人の因縁は確実なものとなった。

観戦していた何人かの隊員が模擬戦をしていた二人より怪我をするという前代未聞の事態に陥った。

ベレッタはその直後に捜査課へと移った。

それからしばらくの間、会ってなかったがここで再会してしまい、再び二人の因縁に火が点いた、という訳である。

ちなみに、裏ではこの二人がくつつくかもしれないという賭けがあったらしいが模擬戦の件で賭けは無くなったと言う。

「ちっ、なんだって機動六課に来やがったんだ」

「仕事だよ。なんか文句ありますか、ヴィータ副隊長殿」

「……ぜってーいつかぶっ殺す」

「おうおう、怖い怖い。逆らわない様にしよう」と

机から立ち上がり、書類のデータを手に取るとそれでヴィータの頭

をポンと叩いたあと、去っていった。

「逆らってんじゃねえか!!」

だがベレッタは既に書類室から出ていた。

残されたヴィータはいらいしながら、書類を書くのを続けていた。

「……あれ」

机に何か置いてあるのに、ヴィータは気がついた。封筒だった。

その封筒を手に取り、中を見るとそこにはヴィータが書くはずの書類のデータが入っていた。

「……くそ、あいつ……」

書類は既に完成しており、このまま出せばOKな状態だった。

「……なんだよ。こういう事、たまにすつから完全に嫌いになれねえんじゃねえか」

だがベレッタにしてやられた、そんな事を考えるとまたイライラし、データを持って書類室を後にした。

ちなみに、封筒の中には小さいメモ用紙が入っており『書類仕事ぐらいちゃんとしまちょうね、ヴィータちゃん』と書いてあるのを発見したヴィータは、すぐさまベレッタの髪をむしりにいった。

つくづく、余計な事をするベレッタである。

「……出張任務？」

朝一番で再び呼ばれたベレッタは、間抜けな声を上げた。
出張任務。第97管理外世界『地球』でロストログアが発見され、
その場所へと向かうとのこと。

ただ、問題はそこへ向かう人物だった。

「せや。あたしとなのはちゃんにフェイトちゃん、シャマルとシグ
ナム、ヴィータとフォワード陣のみんなで出張任務に行く事になっ
たんや」

「……俺は？」

「……へ？」

「俺は？ねえ、俺は？俺は？俺は？俺は？」

「……カークランド陸曹には、隊舎での待機を命じます」

「な、なんだってー！」

ベレッタはとても落胆した。

普段、あんまり悲しんだりすることはないベレッタがここまでショ
ックを受けるとは、はやては正直思っていなかった。

「な、なんや？地球、好きなん？」

「好きって言うか、興味あった」

「ど、どんなのに？」

「競馬つてのがあるんだろ？あと、競輪、競艇とか言うギャンブルもあるし、本場の日本酒つて言うのも飲みたかったんだよ」

「……ベレッタ、何しに行くか分かってるんか？」

「任務だろ？その空き時間に――」

「……もう一度言います。カークランド陸曹は、隊舎で留守番を」

先日の事もあり、ベレッタは大人しく頷いた。
それしか、助かる道はない。そう悟ったから。

とりあえず、見送りという事でヘリポートまでやってきたベレッタ。

「あ、カークランド陸曹……ですよね？」

後ろから声をかけられ、ふり返るとそこには金髪の長髪美人――フ
ェイト・T・ハラオウンだった。

局でもそれなりの有名人で、ベレッタも名前ぐらいは知っていた。

「ああ、そうだけど？」

「挨拶が遅れてすみません、フェイト・T・ハラオウンです」

……そういや、この人にあんま挨拶してなかったな。
せめて隊長陣には（ヴィータを除く）挨拶しときゃよかったな。

「ああ、ベレッタ・カーランドだ。ベレッタでいいぞ、なんか堅苦しいし」

「あ、じゃあ……ベレッタ？で、いいかな」

「ああ」

「ベレッタは、確か六課で留守番……だったよね？」

「まあな。はやてからの命令でな。まあ、この前あんな事をやらかったからだろうけど」

「ははは……」

フエイトは苦笑いを浮かべ、ベレッタも笑っておく。
…と、その直後。

「あ、ベレッタさん、フエイト隊長！」

スバルの声がし、見るとスバルとティアナの姿があった。

「もしかして、ベレッタさんも？」

ティアナの質問に、ベレッタは首を振る。

「いいや、俺は留守番さ。見送りに来ただけだよ」

「そうですか」

そして、しばらくすると出張へ行く全員が集合し、ベレッタ以外はヘリへ乗り込み空へと舞い上がった。
残されたベレッタはがっかりしながら、隊舎へと入っていった。

やる事もなく、隊舎の外で寝そべっていると、誰かが近づいてきた。
体を上げると、そこにはヴァイスの姿が。

「何やってんだ、お前」

「暇だから寝てんだ」

「……グリフィスが、呼んでたぞ」

それを聞くと、ベレッタに疑問が浮かぶ。

「……誰だ、グリフィスって」

「会ってねえのかよ。グリフィス・ロウラン。八神隊長の補佐官だよ。」

隊長たちが出張に行ってる間、ここの指揮はあいつがやるんだ」

「へへ。そうなのか」

そう言いながら立ち上がり、ベレッタは隊舎——の反対側へと向かう。

「どこ行くつもりだ」

「一発してくる。今日はなんだか当たりそうな気がすんだよ」

「やめとけ。グリフィスが八神隊長にチクられて怒られるのがオチだぞ」

「……だよなあ」

いかにもやる気なさそうな歩き方で、隊舎へと向かった。

指令室に入ると、真っ先に立っていたのが例のグリフィスだった。

「初めまして。グリフィス・ロウランです」

「ベレッタ・カークランドだ。……で、用ってのは？」

「カークランド陸曹には、隊長たちが不在中、緊急の任務があった場合、現場での指揮をお願いします」

「俺が？つてか、現場に行けるの俺だけなんじゃねえか？」

「いえ、本局の方から増員が来ております。どうぞ」

そう言うと、指令室のドアが開き、そこから何人か入ってくる。その人物たちに、ベレッタは見覚えがあった。

見覚えがあつて、当然だった。何故なら、増員というのは、禁止区域隊の隊員だった。

そして――。

「お、おっさん!？」

「ようベレッタ。言った通り、様子を見に来たぜ」

真ん中に立つのは、グロックだった。

「グロック隊長たちには、隊長たちが出張任務に言っている間、増員として加わってもらいます」

「よろしく頼みます、グリフィス司令」

その場にいた全員が、敬礼する。

グリフィスも敬礼をし返し、ベレッタもとりあえず敬礼をしておいた。(後が怖いため)

「久しぶりだな、ヴァイス」

「ええ、おやっさんも。相変わらず若々しいっすね」

「おいおい、もういい歳したおっさんさ」

喫煙室で煙草を吸いながら、ベレッタ、ヴァイス、グロックの三人は話をしていた。

ヴァイスはグロックとベレッタを通して知り合い、交流はよくあった。

グロックからすれば、ベレッタもヴァイスもガキの様なものと思っていた。

「どうだ、ベレッタ？バカやってねえか？」

「この前、ヴィータ副隊長に突っかかって大喧嘩しました」

「ほお。……そしてベレッタ。どこへ行くんだ？」

「……ちよつと用事思い出して」

「頭、冷やすか？」

「おっさん、勘弁してくれ」

ベレッタはげんこつだけで済まされた。

ちなみに、グロツクのげんこつはかなり痛いと言っ事で有名だった一部で。

その直後。

赤いランプが点滅し、警報が鳴った。

「なんだ！？」

「アラート？出撃か！」

喫煙室からすぐさま出て、指令室へと向かう三人。

指令室では、グリフィスたちが忙しそうにモニターを見つめていた。

「何があつた！？」

「都心部にあるビル内で、ロストロギア反応があったのですが……」

その直後、巨大モニターにその様子が映る。

そこには、ビルが爆発し、煙が上がっている様子が映されていた。

「どうなってるんだ、これは？」

「ビル内部に、どうやらロストロギアがあっただらしく、そのロストロギアが暴走した模様です」

「……よし、ヴァイス、ヘリの準備だ。グリフィス司令、いいか？」

「ええ。現場での指揮はグロック隊長、及びカーランド陸曹。おねがいできますか？」

「分かった。行くぞ、おっさん、ヴァイス」

「了解だ！」

ベレッタとヴァイス、グロックはすぐさま指令室を出て、ヘリポートへと向かった。

ヘリポートでヘリの準備ができると、ベレッタとグロック、臨時隊員が乗り込むと発進した。

ヘリの中で、グロックが作戦内容を話し始めた。

「このビルは、廃業した会社の跡地らしい。けが人は今のところ出ていないが、このままではいつビルから脱走してもおかしくない。ただちに中へ侵入し、ロストロギアの確保、鎮圧を行ってくれ」

「……了解！」「……」

「あいよ。……行くぞ、レジスタンス」

《了解、リーダー》

デバイスを起動し、バリアジャケットを身にまとったベレッタ。一方、グロックもデバイスを手にする。

「頼むぜ、『バトルフィールド』」

《了解、ボス》

デバイスを起動すると、特殊部隊の様なバリアジャケットと片手にバトルフィールド——TAR-21をモデルにしたアサルトライフルを握り、もう片手にリボルバーを持ったグロックがいた。

臨時隊員はそれぞれ、UMP45——サブマシンガンモデルにしたストレージデバイスを手に持つ。

やがて、ヘリは現場のビル屋上へと到着し、隊員達を降ろす。

「ヴァイス！一応、ここで待機している！ただ、何かあったらすぐさま離れてくれ！」

「了解つす！おやつさん！」

ベレッタ達は、ビルの中へと入っていった。

CHAPTER 1 - 3 「鉄槌の騎士と出張任務と」 (後書き)

NEXT CHAPTER 1 - 4 「決戦！ロストロギア搭載実験体
」！

CHAPTER 1 - 4 「決戦！ロストロギア搭載実験体！」

ビルの中は、ベレッタの思った通りボロボロだった。

壁に穴は空き、中に会った机やいすは破損。

電灯もところどころぶら下がってチカチカと光っており、もはやこのビルはいつ崩れてもおかしくない状況だった。

「おいおい、こいつは……予想以上にひでえなあ……」

グロックが銃を構えて歩きながら、辺りを見回して口にする。

同じ事を、ベレッタは思っていた。

ロストロギアが暴走した？

ここで戦闘でもあった？

それとも、何かまったく違う別の何かが……？

「グロック隊長！これを見てください！」

横の部屋に入った隊員のひとり、グロックの名を叫び、いざなう。ベレッタもグロックの後に続いて、部屋に入る。

「……おいおい、なんだよこれ？」

「そいつは、こいつをつくった奴に聞け」

そう言うしかなかった。

壁には巨大な爪跡があり、どう見ても人間が起こした様なものではなかった。

もっとも、カギ爪型のデバイスを使わない限り。

「……どっちにしろ、このビルはかなりやばそうだな」

「……ああ」

そして、部屋を出ようとした瞬間だった。

ベレッタの目の前を、何かが高速で通り過ぎて行った。……様な感じがした。

とっさに銃を構えたが、辺りを見ても、何もいなかった。

「どうしたベレッタ？」

「……見たんだろ、さっき」

「……何か、通り過ぎたな」

そうか？おい、何か見たか？と言った声が隊員たちの中から聞こえるが、グロックが見たのなら、ベレッタは確実に何か通った。そう確信した。

長年のベテランの言う事は信じれる。そう教わったから。

「こつちだ」

グロックが通り過ぎて行った何かを通った道をたどっていく。ベレッタ達も後に続き、駆け出していく。

だがその先は行き止まり。何もなかった。

大人しく、ベレッタ達は来た道を引き返そう。そう思った。

……だが。

「……ん？」

どこからか、声が聞こえる。

小さい子供の、泣き声だろうか。

「……どうした、ベレッタ」

「足音だ。多分、あいつの」

「本当か。どこにいる？」

ベレッタは人差し指を鼻に当て、辺りをうろつろ徘徊し始める。やがて、壁の近くで足を止め、立ち止まる。

「……ここだ」

少し壁から離れて、手から魔力で何かを構成し始める。
フラググレネーダー。魔力で構成した手榴弾と言えば分かるだろう。
まさしくそれを今、壁に向かって投げようとした。

「おいおい、ここでそんなもん——」

だがベレッタはそれを壁の近くの床に置き、しばらく待つ。
するとドカンと激しい爆発音とともに壁が壊れる音もして、大惨事
となった。

爆風と煙で視界が悪くなるが、ベレッタは壁の奥へと進んだ。
壁の奥は、西洋を意識して作られた様な部屋で、天井は高いが面積
はそれほどないホールの様な所だった。

床に赤いカーペットがしかれているが、崩壊したビルのせいで、今
ではやすっぽいカーペットにしか見えなかった。

その部屋の中を歩きながら見渡していたベレッタ。だが、その瞬間。

「ベレッタ！後ろだ！！」

グロツクの怒声がホールに響き、後ろを振り向くと何かが飛びかか
ってきた。

すぐさまベレッタは横に転がってかわす。

何が飛びかかってきたのかを確認するため、そこを見る。

そこには、怪物という名が相応しいであろう、トカゲの様な形のし
たクリーチャーがいた。

長い舌。

人間なんて真つ二つにされるであろう、鋭い爪。

赤い肉。

「嘘だろ？なんだよこいつ……？」

と、直後に隊員とグロックがベレッタの近くへ駆け寄る。

「……おっさん、こんな狭いところじゃ戦いにくいからどっか行つてろ」

グロックは舌打ちをしながらも、隊員を引き連れてホールを去る。ホールに残されたベレッタと怪物。

二人はたがいに対峙し合い、やがてベレッタは右手でレジスタンス、もう片方の手でキラークイーンを手に持つ。

「……来いよ」

その瞬間、怪物はベレッタへと真っ直ぐに飛びかかってきた。

それをベレッタは再び横にローリング、そのままキラークイーンを怪物に構える。

照準を合わせ、魔力弾を発射。

銃口から飛び出した魔力弾は、怪物の体に食い込む。が、効く様子がまるでなかった。

「くそ！」

続けざまに撃ち、レジスタンスの方でも魔力弾を放つが一向にひるむ様子がなかった。

だが、怪物は今度は壁の方へと飛び付き、壁を走り始めた。

「壁走りがよ！」

レジスタンスを両手で持ったため、一旦キラークイーンをしまい、アサルトバレットを使う。

銃口から放たれた無数の魔力弾は怪物に向かっていくが当たってもやはりひるまない。

だったら、とばかりにグレネードバレットを発射。だが怪物はそれを避けて別の壁へと飛び移る。

「ちつ、ちよろちよろすんじゃねえ!!」

今度はブラックオプスを取り出し、刃に魔力を送る。

すると、刃が深紅に光り始めた。魔力が溜まっていた。

その魔力を払うかのように、ナイフを振る。

すると、刃からその魔力が勢いよく飛んでいき刃に変化する。

バリステックと呼ばれる技だ。

飛んでいった魔力刃が怪物へと向かう。

刃が怪物の足をかすめ、流石に効いたのか床へと転がる。

背中を向けて落ちていったため、起き上がるのに時間がかかるのか、中々起き上がれないでジタバタと手足を暴れさせていた。

チャンスと見たベレッタはすぐさま怪物と距離を縮める。

レジスタンスを零距离で構え、銃口を怪物の体へとくつつける。

「くたばれ!!」

《Shot shell Barrett》

ショットシェルバレット。

ショットガンの散弾の魔力弾バージョンの様なものだが、これを零距离で撃てばかなりのダメージのはず。

怪物はこれをもろに受け、悲鳴を上げてじたばたとさらに激しく手足を動かしてたが、やがて動かなくなった。

息を整え、片手に持っていたブラックオプスをしまい、レジスタンスを肩に背負う。

「……なあ、レジスタンス。なんだよこいつ」

《さあね……。あれ……？》

「どうかしたか——って、これって」

怪物の腹部に、大きな宝石の様なものが埋め込まれていた。

「こいつ、まさか……！？」

《ロストロギアね……。しかも、最悪な事に『デストロイ』じゃない》

「……これで、なんで『あいつ』が俺を機動六課に転属させたのか分かった気がしたぜ」

その漆黒の宝石——ロストロギア『デストロイ』を見ながら、ベレツタは胸騒ぎを感じた。

機動六課に呼ばれた理由。

預言された時空管理局の崩壊を止めるため。

戦力の補充。

そして、

「……あいつらをお縄にしろ、って事かよ」

たった一人のホールで、ただ静かにそう呟いた。

クラナガンにある、とあるビル。

こここの最上階に、男は葉巻を吸いながら、クラナガンの夜景を眺めていた。

と、その時、ドアを誰かがノックした。

「入れ」

ドアが開き、失礼します、という声とともに若い女性が部屋へと入る。

「ガイア様。ミスター・スカリエッティから、連絡が入りました。

実験体『インジェール』は機動六課の職員によって倒され、『デストロイ』は持ちだされました、とのことです」

「そうか……、分かった。スカリエッティに例の新型ガジェットと、『彼』を遅れ」

「かしこまりました」

礼儀正しく、気品が漂うその態度はまるで機械の感じ取れた。女性は礼をして、部屋を後にする。

ガイアと呼ばれた男は、椅子へと座るとデスクに並べている写真を眺める。

その写真の主は、レジアス、はやて、スカリエッティ、そしてベレッタだった。

「……ふん、今になってのこのこ出てきやがったか……」

懷からナイフを取り出し、ベレッタの写真に突き刺す。

「まあいいさ。カーランド、お前の人生も残りわずかだ……！」

男は静かに、不気味に微笑んだ。

「……へいへいっと。あいよ、んじゃな」

通信が切れると、その青年は重い腰を上げ再び夜のクラナガン歩き始めた。

一見、普通の青年に見える彼の表情は、とても機嫌が良さそうに見えた。

「まさか、もうお呼びがかかるなんて……びつくりだな、おい」

1人で呟きながら、茶色のコートのフードを頭に被りながら歩く。

「……まあ、いいけどよ。好きなだけ、人を殺せんだ……！」

『殺す』という言葉が出た瞬間、彼の表情がより笑顔になった。

『へえ、じゃ、『あいつら』も絡んでるって事か』

「ああ……なんか、そうみたいだぜ？」

自室のベッドに座りながら、ベレッタはナイトと通信で会話していた。

煙草を口にくわえながら、片手には酒のビンが握られていた。

『つつことは、あの入、これを予測して？』

「みてえだな。ったく……最初からそうやって言えばいいのによ」

『いつものこったろ。……それより、あれマジか？』

ベレッタが溜息をついた。

それを見たナイトはさらに追及していた。

『ヴィータちゃんとまた夫婦喧嘩したんだってな』

「……今度一杯ひっかけねえか？いろいろ話してえんだけど」

『遠慮しとくよ。それより、『あいつら』が絡んでるって事は、例のレリックも……』

「ああ、どうやら今回の事件……めんどうな事になりそうだ。とりあえず、一旦切るぞ」

『疲れてんだろ？ったく、そろそろ煙草やめとけ』

「……忠告どつとも」

そう言つて、ベレッタは通信を切る。

溜息をつきながら、酒のビンを口に運ぶ。

「……レジスタンス」

《何よ？》

「お前、擬人化能力持つてねえのか」

《何？色々溜まつてるからアタシに捌かせろつて？バカじゃないの？》

「そこまで言つてねえつての。……まあ、なんでもいいわ。俺は寝る」

そう言つて眠りについたベレッタ。

レジスタンスも溜息をつきながら、スリープモードへと移行した。

「留守番、御苦労さまや」

「そりゃどうも」

次の日の午後。ベレッタは部隊長室にさつき帰つて来たばかりのはやてにそう言われ、礼をする。

彼女たちは出張任務先に現れたロストロギアは封印し、無事任務を

終えていた。

「で、何の用だよ？まあ、どうせロストロギアの話だろうけど」

「あの『デストロイ』言うロストロギアの事調べてたら、とんでもない事が分かったんや」

これを見てほしいんやけど、と言った直後、ベレッタの横にモニターが映し出される。

そこには、男の顔写真と『デストロイ』のロストロギアが映し出されていた。

「スパーズ・マクタビッシュ。ロストロギアや質量兵器、その他色々な物を密売してる武器商人みたいな奴で、広域指名手配犯や」

「……」

「知ってるみたいやね？」

「……ちよつとな。んで？」

「過去にこの男の事、フェイト隊長が調べてたんやけど、フェイト隊長によると、この男はある男と繋がってたんや」

と、スパーズの写真の隣に、再び別の男の画面が映し出される。

「……こいつは」

「ジェイル・スカリエッティ。こっちも広域指名手配されている次元犯罪者や。」

この前の暴走列車事件、あのガジェットの多くがどうやらスカリエッティの物らしいんやけど、そのガジェットの中に、スパースが販売してるガジェットの物も混じってみたいや」

「なるほどな。スカリエッティがスパースのガジェットをいくつか買って、そいつを列車の時に使ったってわけか」

「これは3日前、禁止区域隊の隊員が撮った写真なんやけど、二人に何か関係があるのは事実や」

スカリエッティの顔写真の横に、二人が密会をしている写真が映し出された。

この写真が合成じゃない限り、二人は確実に関係がある、という訳だ。

「『デストロイ』は、元々古代に人の手で造られたロストロギアで、今までも多数の『デストロイ』が発見されとる。

過去になんとか、『デストロイ』を使った事件は、大抵はこのスパースから売られた物や」

「なるほどな。でも、今まで使われた『デストロイ』は大抵はガジェットとかの無人戦闘機だろ。なんだって今回はこの怪物に……」

密会写真の横に、怪物の写真が映し出される。

「そこはまだ分からへん。せやけど、この怪物は『デストロイ』の力によって出現した……というのは事実やろ」

「だろうな」

「スパーズはもちろんやけど、スカリエッティも今回の事件に関係があるんかもしれへん。」

……ベレッタ、スパーズの事、何かしらへんか？」

それを聞くと、ベレッタは息をつく。

「まあ、顔と名前、あいつが何をやらかしてるやつかってことぐれえだ。他は知らねえ」

「……分かった。まあとりあえず、これから彼らが絡む事件は、激しい戦いになりそうや。」

あの怪物の方も、今本局が調査しとる。分かったら、すぐに連絡を入れさせてもらうで」

「そりやいいけど、なんで俺なんだ？」

「ベレッタがあたし直属の部下やからや。もちろん、なのは隊長やフェイト隊長にも伝える。」

それと、ここから先はベレッタと相談なんやけど、もしよかったら、フェイト隊長とこの事件の捜査をお願いしたいんや」

「……そりや、別に構わねえけど」

「分かった。ほんなら決まり」

その後、ベレッタは部隊長室を後にした。

部隊長室から出ると、息を整え、ポケットに手を入れると廊下を歩く。

「……下手すると、俺たちの存在もバレちまうなこりゃ」

まあ『あいつ』が何とかするだろう。
そう思いながら、ベレッタは自室へと戻った。

CHAPTER 1 - 5 「暗躍する影」 (前編) (前書き)

伝説

「今思っただけどさ、君主人公？」

ベレッタ

「……はあ」

CHAPTER 1 - 5 「暗躍する影」 (前編)

「……相変わらずだな、あいつら」

「ああ、いいよなあ、若いってのは」

「若いからこそ、成長が速いのだろう」

「さすがまとめ役シグナム。お前もお前で相変わらずだな」

4つのモニターに映し出されたスバルたちの訓練の様子を見ながら、ベレッタとヴァイス、そしてシグナムは話をしていた。

シグナムは、ベレッタが武装隊にいた時の上官であつてよく面倒事を起こしては説教を受けたりしていたが、ベレッタにとっては先生のようなもの……と周りは思っているが、本人は思いたくないようだ。

「お前も、上官に対しての言葉遣いが治つてないようだな」

「そりゃもちろん」

「……レヴァンティン」

「ああ嘘だ嘘、すいませんでしたシグナム副隊長」

「……成長してねえなあ、ベレッタ」

「黙れヴァイス。お前こそ、まだ言つてねえのか」

その瞬間、ヴァイスの顔が険しいものへと変わる。
ベレッタは両手を上げて黙つて謝罪をする。

「……よろしい」

「よろしいじゃねえよ、ったく……。それより、シグナムはあいつらに何か教えねえのか？」

「私は、古い騎士だからな。スバルやエリオの様なミッドが混じつた近代ベルカ式とは勝手が違う。それ以前に、私は何かを教えると言つ柄ではないからな。届く距離まで近づいて、剣を振ると言つぐらいだ」

「ははは、すげえ奥義だとは思ふんっすけど……まだ連中にはちい

「っと早いっすね。ってか、ベレッタはいいのかよ？こんな所で油売
ってて」

「大丈夫だよ。俺はなのはかヴィータのクソガキが来いって行つた
時しか行かねえから」

「相変わらず、お前とヴィータは仲が悪い様だな。この前のと言い」

「悪いんじゃないんだよシグナム。元々合わないんだ」

「にしちゃ、戦闘中は妙に息が合つんだよな二人とも……」

「ヴァイスがこっそりと言つて」

「ベレッタには聞こえてないようだ」

「……と、終わったようだ。私達も戻ろっ」

「そうだな。そっぴや、昼飯の時間だったな」

「スバルたちの訓練が終わり、ベレッタ達は隊舎へと戻る事にした」

「君を見ると、いつもハートドキドキ」

「聞いた事ねえ歌だな。おまけになんだその歌詞」

「何故か頭によぎった」

まるで誰かに頭の中で言われたかのような感じ。と付け加え、昼食のスパゲティを頬張るベレッタ。

溜息をつきながら、ヴァイスはパンをかじった。と、ヴァイスはある事をベレッタに聞く。

「そういえば、明日の任務聞いたか？」

「ああ、ホテル・アグスタのオークション護衛だろ？　たく、めんどくせえ……」

「そう言っなよ、仕事だろ？」

「……そっだな」

スパゲティを再び口に入れると、いつのまにか皿にはスパゲティが無くなっていた。

ベレッタとヴァイスは互いに顔を見合わせる。

「……おかわりするか？」

「おう」

「そっいや、はやては？」

「ああ、今陸士108部隊のナカジマ三佐のとこ行ってるよ」

午後の訓練場。

ベレッタはなのはの要請で訓練を見る事になった。

午後からは午前中に見ていたフェイトが見れないため、代わりといったものである。

今はヴィータといっしょに訓練場でなのは達を待っていた。

「ナカジマって、もしかしてゲンヤのおっさんか」

「知ってんのか？」

「ああ、陸士106部隊の時に、108部隊と共同任務があつてな。そんな時に色々」と

「ナカジマ三佐は、はやての師匠みてーな人なんだ。歳の離れた友達って感じだけだな」

「ふん。そうか」

「……言つとくが、はやてはお前みたいなチャランポランには興味ないぞ」

「何の話だよ。それに、俺は別に好きでもなんでもねえ」

「それにあたしが許さねえ」

「……ハイハイ」

丁度のタイミングで、なのはとスバルたちがやってきた。

「じゃあ、夜の訓練終了」

「……あ、ありがとございました……」

「にしても、お前朝からずっと連中につきつきりだよなあ、疲れねえのか？」

「そりやお前、なのはこれが仕事だろ。あゝあ、これだからガキは――」

足を思いつきり踏みつけられ、悲鳴にならない声を出すベレッタ。し返しに何かしてやろうかと思ったが、これ以上すればまたこの前の様になりかねないのでやめた。
第一に、グロック達が帰る時に。

――一応、俺にもお前をクビにすることだってできるぞ？

釘を刺されてしまって、下手な事は出来まいというのを思い出したため。

「わたしは機動六課の戦技教官だもん、当然だよ」

「大変だな、教官つてのも」

「でも、ヴィータちゃんも良くできてるよ。立派立派」

なのははヴィータに歩み寄り、頭に手を置き撫で始める。

ヴィータは撫でるな〜！と怒っていたが、まんざらでもない様子だった。

ベレッタは首を振りながら、隊舎へと戻った。

次の日。

ベレッタはヴァイスが操縦するヘリに隊長陣＋フォワード陣＋αの面々と共に乗っていた。

分かると思うが、任務の為である。

「ほんなら、これまでの事件の流れと今日の任務のおさらいや」

ヘリの壁によりかかって、はやての近くに映し出されたモニターを見るベレッタ。

そこには、スカリエッティの顔写真が映し出されていた。

「これまで謎やったガジェットドローンの制作者、及びレリックの収集者はこの男——ジェイル・スカリエッティの線を中心に、捜査を進めていく」

「こっちの捜査は主に私と、ベレッタがする事になったんだけど、みんなも一応、覚えておいてね」

フェイトがそう言うと、スバル達は頷く。

「それで、今日これから向かうのはホテル・アグスタ」

リンが出てきて、アグスタの画面に変わる。

「骨とう品オークションの警備と人員警護。これが今回のお仕事ね」
骨とう品をレリックの反応と間違えて出てくるガジェットが現れる可能性があるのでその警護。
新人たちと副隊長、医務官であるシャル、そしてザフィーラが外の警備、なのはとフェイトとはやては中の警備。
ベレッタは一応、中で待機し、状況次第で外に援護、という形になっていた。

「あれ、その箱なんですか？」

そう言つて、スバルは山積みされた箱を指さす。
隊舎でヘリに乗り込む際、いっしょに乗せていた。……ベレッタとヴァイスが。

「隊長達のお仕事着です〜！」

「お仕事着？」

「ふ〜……」

ホテルの外で、煙草を吸うベレッタ。

服装はいつもの管理局の制服ではなく、スーツ姿。

オークションの護衛に、制服では目立ちすぎるため、という事だ。ちなみに、なのはやはやて達もドレス姿に着替えていた。

「……………にしても」

煙草を灰皿にこすりつけ、ホテルの中に戻る。

その中にはオークション客でにぎわっているが、ベレッタはその中の客の異様な雰囲気を感じていた。

この中に、もしかしたらスパーズやスカリエッティが？それとも、別の人物が？

なんにしろ、ベレッタは戸惑いを感じていた。

《大丈夫じゃないの？この人たちだって、局の人間がいるって分かってるはずよ。そう簡単に……………》

「そんな派手な事はしねえだろうさ。ただ、外から気づかれない様に……………つてのも、あるだろうよ」

《なんにしろ、警戒を怠ったらアウトね》

ベレッタは、頷きながらオークション会場の前をブラブラしていた。と、そこに青年が横を通りかかる。

それを見て、ベレッタは動きが止まった。

「……………おい」

「あれれ？奇遇だなあ、ベレッタ」

そこには、タキシードに身を包んだナイツの姿があった。

「なるほどな、オークションに出るスクライアのパシリか」

人気の少ない廊下の一角に、二人はいた。

「ああ、まあどうせ司書長がオークション終わるまで俺は待機だ。実際、見学みたいなもんだよ」

「……で、なんでここを話し場所にした」

そう言いながら、辺りを見渡す。

ホテルのホールほど人は通っていないが、ベレッタは先ほどの異様な雰囲気——視線を感じていた。それはナイツも同じであった。

「分かんדר？それぐらい」

「ああ、大体な」

そう言つて、二人は静かに近くのドアに歩み寄る。

ベレッタはそのドアを蹴飛ばし、中を見渡す。

ダンボールが多く積み上げられているが、人の気配はあった。

二人は別れてそれぞれ部屋の中を探し始める。

ベレッタが部屋の角まで来た瞬間だった。

「！」

突如、ダンボールの山の上から人影が飛び出す。だが奇襲など読んでいたベレッタはそれを避け、拳を着地した人影に向かって突き出す。

渾身の拳は顔面に突き刺さり、壁へと叩きつけられた。音を聞いたナイツはベレッタの元へと走り寄った。

「……こいつが、俺たちを？」

「だろうな。……んで、なんで俺たちをつけてきた」

しゃがみこんで、その人影——フードで顔を隠した男に尋問する。しかし、男は黙ったままだった。

「……しゃあねえなあ」

ベレッタはキラークイーンを手に持ち、額に銃口を突き付ける。

「……まだ死にたくねえだろ？世の中楽しい事ばっかなのに」

流石に驚いたのか、それとも脅えたのか。

男はフードを外して身に纏っていたマントも外す。

「管理局員か」

そのマントの下には、局の制服を着ていた。もう脅す必要ないと悟ったベレッタは、キラークイーンを『ベルトの間』におさめた。

「レジアスのクソジジイの命令か？」

「……ああ」

「『あの部隊』の事、どこまで知ってる？」

ナイツが口を開くと、局員も再び喋り始める。

「……バックに、彼がいる事」

「ちっ、そこまで知ってんのか。どうするナイツ？バラすか」

「お前本当に主人公かよ、どう見ても悪役じゃねえか」

「この場面でメタ発言やめろ。いいから答えねえとてめえもバラすぞ」

「結局殺るつもりだったのかよ。だけどまあ、そこまで知られてるとまずいな。バラすのはとりあえずやめとけ。こいつ殺しても意味ないし」

そりゃそうか、と言って立ち上がる。

その瞬間。

「ッ！！」

局員がベレッタにタックルを繰り出そうと立ち上がり、駆けってくるが、ベレッタはすぐさまキラークイーンを抜き、肩を撃ち抜く。

「がはっ……！」

「バカなことすつからだ。ナイツ、とりあえず治療魔法で回復させた後バインドで縛って放置しとけ。後で迎えに来て話はそれからだ」

「だな。『あの人』にも連絡しとかないとな」

そう言つて、バインドで身動きをとれなくした後、回復魔法を使い傷口を治した後、そのまま部屋に放置した。

ちなみに部屋にはたまたま発見した『掃除中』の看板を扉にかけておいた。

廊下を歩いていると、誰かからベレッタに通信が入る。
そこには『八神はやて』と書かれていた。

「お呼びみたいだぜ？」

「……だな」

溜息交じりに通信を開く。

『ベレッタ、敵襲や』

「おし来た」

『お待ちかねみたいやね。せやけど、今度は気を付けた方がええ。新しい新型の生物兵器が確認されとる』

「生物兵器……？」

聞きなれない言葉が飛び出し、ベレッタは復唱してしまう。

『例のデストロイを搭載した怪物や。本局ではこれを生物兵器言う事にしてみたいや』

「いきなり言われてもだな。……まあいい。とりあえず、行けばいいんだな？」

『せや。フォワード陣が今戦闘中やけど、ベレッタはその生物兵器を倒してほしいんや』

「経験豊富……だからか？ つつてもそりゃ買いかぶりすぎだぜ？」

『フォワード陣のみんなよりは経験あるやろ？』

「だな。了解、すぐそっちに向かう」

通信を遮断する。

「お仕事みたいだな」

「ああ、悪いがおしゃべりはここまでだ」

そう言うと、ナイツはふう、と息をつく。

「で、ベレッタ。仕事は？」

「……生物兵器の話、知ってるな？」

「ああ、『あの人』から聞いた」

「なら話は早え。頼みがあんだけどよ」

「後で酒奢れ」

「好きにしろ」

手短に用件を話すと、ナイツはすぐさまその場所へと向かった。
残されたベレッタは、ホテルの外へと駆けだした。

CHAPTER 1 - 6 「暗躍する影」(後編)

ホテルの外へと来たベレッタは辺りを見渡す。

森の方は既に戦闘が始まっており、ガジェットが破壊される音が聞こえる。

ベレッタはレジスタンスを起動して、一応空へと昇る。

「レジスタンス、生物兵器は!？」

《待つて、今検索中……。出た!裏の地下駐車場出入り口付近よ!》

「駐車場？やっぱ思った通りだな……」

ホルスターからライクイーンを取り出し、裏口へと向かう。
向かう途中、ガジェットの群れに遭遇した。

「どけえ！てめえらに用はねえんだ！」

《Assault Bullet》

魔力弾の嵐がガジェットに襲いかかる。

ガジェットの体に風穴があき、爆散して転落する。

やがて、ベレッタはホテルの裏の地下駐車場出入り口に到着する。
着地して、辺りを見渡しエリアサーチ開始し、生物兵器の場所を検索する。

《いた！あそこよ！》

「おらよ！」

《Grenade Bullet》

木が立ち並ぶ森の中へグレネードバレットを発射する。

爆発し、やがて飛び出してきたのは前回戦ったタイプとは違ったタイプだった。

「……作った奴、どんな趣味してんだ？」

見た目は蜘蛛。

だが二足歩行し、体中に足がついていて、まさに『キモい』と言う言葉がお似合いだった。

「さあ、来いよ。丁度食い足りなかったんだ」

生物兵器が叫び声を出し、その衝動に一瞬驚くがすぐに切り替え、駐車場の中へと走る。

ここでは狭いため、戦うのは不利と判断したためだ。それに地下では、『助っ人』もいる。

「なあ、そうだろ!？」

地下へ走っていると、大きなトラックが見え、その近くにガジェットの残骸の山に立つナイツの姿があった。

その手には自らのデバイス——『メダルオナー』を持っていた。

こちらは小型のサブマシンガン型のデバイスで、取り回しが効くのが特徴だ。

「こいつが例の!？」

「ああ、先に倒した方が酒を奢るのはどうだ？」

「いいねえ、乗ったぜ!！」

二人で並んで、生物兵器と対峙する。

ベレッタもナイツも、その表情は余裕に満ち溢れていた。

「……んじゃあ、派手に行こうぜ!！」

「おうよ!！」

生物兵器が叫び、それを合図に二人は左右へと散らばる。

ナイツが魔力弾を生物兵器に浴びせるが、ひるむ様子がなかった。

「ちっ、かてえ！」

「だったら撃ち続けりゃいいんだ！銃身が焼きつくまでな！」

キラークイーンとレジスタンスから魔力弾を撃ち続けるベレッタ。だが、まったく効く様子がない。

それどころか、むしろ動きが活発になる様に見えた。

「くそ、これなら！」

手から魔力を形成し、それを投げつける。フラググレネーダーだ。それを口へと投げ入れ、爆発すると動きがもろくなる。

「中はスカスカだ！カビたパンだぜこいつ！」

「もっともな例え方だ！俺も続くぜベレッタ！」

同じくナイツも紫色の魔力を形成する。

ナパームフラグ。基本はフラググレネーダーと同じだが着弾すると炎が出る。

同じく口の中に投げ入れ、うめき声をあげる。

「ひゃっほい、胃の中がバーベキューだ！」

「いらねえな、そんなもん！！」

ベレッタが炎と爆発でもろくなった体の表面にブラックオプスを投げつける。

ナイフが突き刺さり、うめき声をあげる。

そろそろ蜘蛛も虫の息のようで、後一撃でも加えれば息絶える状態だ。

「とどめ、もらったあ！」

ナイツが上空へとジャンプし、マシンガンを構える。

カートリッジ2発がマシンガンから飛び出し、照準を合わせた。

《Machine Bullet》

大量の魔力弾が飛び出し、それは蜘蛛の体中に穴を開けた。

やがてうめき声を上げながら、その場へと倒れ込む。

完全に息絶えた。

ナイツ着地したと同時に、ベレッタが口笛を吹く。

「すっげ」

「俺の勝ちだな。今夜いつものバーで」

「……しゃあねえ、負けは負けか」

「そう言う事だ」

溜息をつきながら、二人は現場に局員を要請した後、駐車場を後にした。

「にしても、やっぱり思った通りだったな」

任務が終わり、ホテルのロビーの椅子に座って話すベレッタとナイツ。

現場検証は六課や局員に任せて、二人はここでのんびりする事に。当然、ばれれば書類物だが。

「ああ、ガジェットがロストロギアに反応するんだったら、そのロストロギアを積んでるトラックに向かってくるんじゃないかと思ったが、本当に来やがったな」

マニュアル通りだ、と二人が笑いながら言う。

「ああ、そうだ。俺たちを襲ったあいつ、『あいつら』が回収してつたぜ。もちろん、表に気づかれねえように」

「ご苦労さん、後はあいつが吐けばいいけどな」

そう言って、二人は立ち上がり現場へと向かう。

やはりまずい。そう思いながら歩きだす。

ガジェットの残骸が大量に転がっている森の中へと二人は向かった。これを破壊したのはフォワード陣と副隊長のシグナムとヴィータだった。

「にしても、派手にやったなお前の部隊」

「いつものこった。どうせこの残骸からして、ティアナと『チヴィータ』だろ」

「普通にヴィータって言えよ。ってか階級的にはあいつの方が上だろ」

「嫌いなんだよ」

「んな事、世間の常識だろ」

軽口をたたき合いながら、やがてフェイト達がいるところへとたどり着いた。

「あ、ベレッタ。それと……」

「ナイツ・アーマメントです。無限書庫の司書やってます」

「って事は、ユーノといっしょに来たっていう？」

「ええ、まあ」

ユーノって、無限書庫のスクライアの司書長事か？

ベレッタはそんな上の人間を名前で平気に呼べるぐらい親しいのかと疑問を抱く。

「ハラオウン執務官は、司書長と幼馴染なんだよ。ついでに言うと、高町教導官と八神部隊長もだ」

「なのはの方は知ってた」

「なんで？」

「人の色恋沙汰は自然と耳に入るんでね」

ナイツは何を言っているのかよく分からなかった。ベレッタは咳払いをして、フェイトの方を向く。

「フェイト、なのはは？」

「今、ユーノといっしょ」

「あつ、そう。ならお邪魔になりそうだな」

「みたいだね」

完全に置いてけぼりにされたナイツは溜息をつく。

フェイトとベレッタはと言うと、にやにやと意味ありげな表情をしていた。

「『エネミス』もやられたか」

高層ビルの最上階。

そこに、スパーズはいた。

いつもの座っている仕事部屋の椅子に座り、通信でスカリエッティと会話していた。

『ああ。だが、成果はあつた』

「データか。後で転送を頼む」

『まかしておきたまえ。それと、ガジェットを何個かこちらに送っていただきたい』

「分かった。引き続き、頼むぞ」

通信を切ると同時に、ソファに座っていた青年が立ち上がる。
そのままスパーズのところへとゆっくりと歩く。

「そろそろ、俺の出番か？」

「ああ。頼むぞ」

「任せな。ベレッタとナイツだったか？つええんだよね？」

「まあな」

「楽しみだぜえ……。こんなに血が騒ぐのは久しぶりだ……！」

その表情は、おもちゃを与えてもらった子供の様だった。

「頼りにしているぞ。ジュン・ガリルージュ」

「ああ、まかせな……！！」

ジュンは部屋を後にした。

CHAPTER 1 - 6 「暗躍する影」 (後編) (後書き)

NEXT CHAPTER 1 - 7 「思いと願いと」

CHAPTER 1・EX「シークレットジョーカーと鉄槌の騎士」(前書き)

伝説

「別名、ベレヴィタ」

ベレッタ

「なん……だと……？」

CHAPTER 1 - EX「シークレットジョーカーと鉄槌の騎士」

「おりゃあああああああああ！！」

「はあああああああああ！！」

爆発音が、訓練用シュミレータで作られた廃市街に響く。
紅色の閃光が輝いたのは、廃ビルが倒れる直後だった。
その中から、ベレッタとヴィータが飛び出す。
空中で激しい戦いを繰り広げながら、やがて対峙する。

「はあ、はあ……」

「いい加減……降参しろよクソガキ……」

「誰が………するかあああ！！」

ヴィータが愛用のハンマー型デバイス——グラーフアイゼンを構えて突進する。

それをベレッタはギリギリで避ける。もう1時間もフルで動いているため、体力が限界に近付いてきていた。

だがそれもヴィータも同じであった。動きにキレがなくなり、ほぼ

ヤケで動いていた。

しかしそれはベレッタも同じ。

ほぼ限界状態だったが、それでも二人は戦っていた。

上空へのぼり、キラークイーンで魔力弾を放つ。

その魔力弾をアイゼンで打ち消しながら距離を縮めるヴィータ。

ベレッタは舌打ちし、ブラックオプスを取りだすとそのままヴィータに向かって突進。

徐々に距離を縮め、爆発音がしたと同時に再び紅色の閃光が上空で輝いた。

「
……」

「
……」

気まずすぎる空気が、六課隊舎の部隊長室に流れる。

そこには頬に絆創膏をし、左手と右手に包帯を巻いたベレッタ。

額に包帯を巻いたヴィータ、無傷のはやての姿があった。

ちなみに、はやては部隊長机に、二人はその前に立たされていた。

「よかつたなあ、なのはちゃん出張で」

「
……」

「なのはちゃんいたらきつとその程度じゃすまんかったやろうなあ」

「
……」

「返事!!」

「はっ、はいっ!!」

「……はあ、なんでそんなに息が合うのに、仲悪いんやろ」

「だってこいつが!!」

はやてに睨まれ小さくなる二人。

それはまるで脅える小動物そのものだった。

「……とにかく、スバルとエリオには謝るとき。怪我させてるんやから」

模擬戦を見学していたフォワード陣のうち二人が、ビルの破片が飛んできて怪我をしていた。
と言ってもかすり傷程度だが。

「……おっ」

「うん……」

とぼとぼしながら、部隊長室を後にする二人。
ドアが閉まり、二人とも顔を見合わせる。
……が。

「ふん!!」

そのまままたがい反対方向へと進んだ。

医務室に最初に来たのはベレッタだった。
ドアを開けると、すぐそこにはスバルとエリオ、ティアナとキャロ
の姿があつた。

「あ、ベレッタさん」

「おう。……その、悪かったな。怪我させちまって」

「気にしないでください。かすり傷でしたし」

「それに、すつごく勉強になりました」

あれが勉強になるか？

それともただ隊長陣の本気を見たから？
なんにしろ、ベレッタは苦笑いした。

「あ、あの、ベレッタさん……」

「ん？」

キャロが顔を赤くしながら、ベレッタに歩み寄る。

「べ、ベレッタさんって、ヴィータ副隊長と恋人なんですか!？」

「……………は？」

それを言った瞬間、残りの三人も歩み寄ってくる。
ベレッタは間の抜けた様な顔をしていた。

「そうなんですか、ベレッタさん？」

「んな訳ねえだろ。あんなお子様、興味ねえよ」

「そうなんですか。だって二人ともすごく仲よさそうでしたから」

「仲良かったらお前らは怪我してねえよ」

髪を掻きながら、溜息をつく。

ベレッタはその後、再び謝るとそのまま医務室を後にした。と、ドアの横を見ると、そこにはヴィータの姿があった。

「……んだよ」

「うつせえ、ニコアル中」

「黙ってるクソガキ」

つーかどこで覚えたニコアル中なんて言葉。そう言いながら、自室へと戻った。

何故こうなったのか、説明しよう。

今日はなのはが本局へ出張の為、ベレッタとヴィータ、フェイトが訓練を見ることとなった。

フェイトもいたため、ギスギスした様子はなかったが、それは模擬戦をする事で勃発した。

新人の勉強の為にベレッタとヴィータが模擬戦をすることとなった。
……が。元々仲が悪い＋二人とも短気＋軽くバーサーカーな二人は
そのまま熱が入って来てあぁなってしまうたと言う事である。

「……たく、何が気に入らねえんだか……」

ベッドに寝転びながら、あくびをする。

既に時刻は深夜と呼ばれる時間帯。ベレッタも人間であるため、眠
くはなる。

「……ああ、くそ」

何かムシャクシャする。

何故こんなにムシャクシャするんだろう。

あいつ——ヴィータを見ると、なんであんなにイライラするんだ。
昔っからそうだ。最初に会った時から何かあったら突っかかってく
る。

だから俺も突っかかって……結局あなる。

でも、今思えば、部隊が変わってから何故かイライラした。

だが、ヴィータと色々する時のイライラじゃない。

何か違う……自分でもよく分からない様なものだ。

「……寝よ」

そんな事考えてたら、ますますイライラする。
横になって、眠った。

「……よお」

「…………おう」

次の朝。

自室を出てすぐの所に、ヴィータが突っ立っていた。

一瞬、朝から襲いに（戦鬪的な意味で）かかってくるのかと思って身構えたベレッタだったが、違った。

何やら体をもじもじさせながら、目を合わせたり合わせなかったり。

「なんだよ。一緒に飯でも食いたいのか？」

「ちげえよバカ。……その……」

分からん。何が言いたんだこいつは。

普段見せた事の無いヴィータのそんな姿に、色々と不安になるベレッタだが、とりあえず平然を装う。

「なんだよ？」

「その……き、昨日は、悪かったな……」

「…………へ？」

自分の耳は病気なのか、と一瞬思ってしまったベレッタ。

ベレッタに対して、そんな言葉を口にするなんて思ってもみなかったので、口をあぐり開けて黙りこんでしまった。

「…………んだよ」

「いや、その……お前、熱でもあんのかなって」

「ッ！」

ベレッタを睨みつけるヴィータ。

正直、あまり怖くなかったベレッタだったが流石に今回ばかりは変な事を言わない事にした。

黙ってヴィータを横切ろうと歩き出すが、途中で止まる。

「……俺も、悪かったな。ヴィータ」

「あ……」

ベレッタはそのまま再び食堂へ向かって歩く。

ヴィータはと言うと、ベレッタの姿が見えなくなるまでボーっと突っ立ってしまった。

やがて見えなくなると、

「……まともに名前呼ばれたの、初めてだ」

そんな気持ちは、ヴィータにとって初めてだった。

多分、これがきっかけ。

後に二人が織りなす奇跡の、序曲であったのかもしれない。

「逃げんなニコ中！」

「黙ってるガキンチョ！！！」

だが今は、そんな様子はまったく見られなかったが。

CHAPTER 1 - 7 「思いと願いと」

ベレッタ達が六課の隊舎に帰ってこれたのは、その日の夕方だった。すっかり疲れたベレッタは自室へ入るとすぐにベッドへと倒れ込む。そのまま仰向けになって、今日の事を思い出す。

「蜘蛛とレジアスの手下……か」

ナイツの連絡によると、ホテル地下に置き去りにしておいた手下は『例の部隊』が回収したという。その先は分からないが。しかし、ベレッタにはだいたい予想が付いていた。

どうせ拷問されて色々吐いているに違いない。レジアスが本格的に動き出すのも時間の問題だろう。

上半身を上げて、煙草を取り出す。

と、口にくわえてライターの火をともした瞬間だった。

誰かからの通信が入り、溜息をつきながら煙草をベッドに置いてから、通信を接続する。

画面に現れたのは、ナイツだった。

「よう、どした？」

『手下が色々吐いたってよ。詳しい事はいつものバーで』

「ああ、俺のおごりのか」

『約束だぜ？』

「分かってるよ。負けぐらい素直に認めないと、ギャンブルなんてできないからな」

と言ったものの、酒好きのナイツの事だ。

高い酒を頼むに違いない。

そう思うと、財布の軽いベレッタは溜息をつく。

『そういうところはきっちりしてるよな、お前。とりあえず、8時にな』

「ああ」

通信が切れると、改めて煙草を啜って先端に火を付ける。

紫煙を吐くと、啜えたまま自室が出る。

8時まで自室にいてもつまらないので、どこかへ行く事にした。

……が。部隊長室の近くの廊下を通り過ぎたところだった。

「ベレッタ、隊舎は基本禁煙だぞ」

後ろから聞こえる声。

ゆっくりと振り向くと、そこには仁王立ちしたシグナムの姿が。
あははは……とごまかしながら、携帯用灰皿に煙草を突っ込み、ポ
ケットにそれを入れる。

「悪い、ニコ中だから俺」

「知っている。……まったく、吸いたければ喫煙室に行け」

「ごめんごめん。で、何の用？」

「いや、煙草の匂いがしたからそこへ行けば、お前がいたと言う訳
だ」

「そういうことね」

髪を掻きながら、シグナムに一応礼をして退散する。
そして続いて会ったのは……。

「……出た、チヴィータ」

「普通にヴィータって言え！ってかいきなりなんだよー！」

「悪い、癖で」

「その癖……今すぐ叩きなおしてやる……！」

今にもアイゼンがベレッタの頭に飛んできそうだったので、これ以

上はやめておく事に。

話を変えようと何かネタを考えるベレッタだったが、その前にヴィータが口を開く。
ちよつと暗い顔をしながら。

「なあ、ベレッタ」

「あんだよ？悪いがディナーのお誘いは遠慮しとくぜ」

「ちげえよバカ。……ティアナの事なんだけだよ」

それを聞くと、ベレッタはアグスタから帰る時にヴァイスから聞いた話を思い出す。

ティアナが無茶をして高度な魔法を使って、その流れ弾がスバルに当たりそうになった事。

それについてなのだろうか、ベレッタは冗談を言わない事にした。

「魔導師が強くなりたいう気持ちわかる。……けどあれはやりすぎだ」

「……」

「お前、なんか知らないか？」

「……別に。幾つか心当たりはあるけど、冷静に考えればどれも関係ねえな」

そう言いながら、そのまま何も言わずに去ろうとする。
が、ヴィータはそれを何か隠していると悟り、ベレッタの腕を掴む。

「……離せよ。そんな事、なのはやフェイトに聞いた方が早いだろ。俺に聞くのはお門違いだ」

「知ってんだろ、お前」

「知らねえよ、離せ」

「ちっ……」

時間の無駄と判断したヴィータは舌打ちをし、そのまま腕を離す。自由の身になったベレッタだったが、その場から動こうとしなかった。

むしろ、明後日の方向を見ているベレッタに、ヴィータは疑念を抱く。

「どうしたんだよ？」

「……なあ、ヴィータ」

「え……？」

「……なんだよ、その新鮮な驚き」

「いや、珍しくまともに名前呼ばれたなって」

「先々週も同じネタしたろうが」

「？」

「なんでもねえ」

最近多いメタ発言に溜息をつきながら、ポケットに手を入れてヴィータを見据える。

ベレッタと会話をしてこんな真面目な雰囲気になった事がないヴィータはかなりの驚きと恐怖の様なものを隠せなかった。
が、気にせずベレッタは話を続けた。

「人間って、弱いよな」

「はあ？」

「いつまでも暗い過去をずるずる引きずって……結局、それで自分をダメにしちまう。」

何人かはそれがダメだつて分かってても、結局引きずるんだよな。切り替えができないっつーかなんっつーか……」

「……何が言いたいんだよ」

「とりあえず、ほっとけて事だ。第一、ティアナが無理してんならそれがいつか面倒な事になる前に止めるのも教導官の仕事じゃねえのか？」

「お前に言われなくても分かってるよ」

「だったらいいさ。悪かったな、素人の意見で」

そのままベレッタはその場を去った。

その後ろ姿を、ヴィータは見えなくなるまで見つめていた。

やがて見えなくなると、ベレッタに物を言われると言う屈辱やティアナの事でムシヤクシヤしながら自室へと戻った。

ベレッタがバーに到着したのは8時過ぎの事だった。

ナイツが既に座っているカウンター席の横に座ると、ナイツはよお、と言う。

その手には、既に注文している高そうな酒が握られてあった。

「……俺、最近ツキ無いから金ねえんだけど」

「ツキが無いお前が悪い。約束は約束だ」

「おっしやる通りです」

そう言いながら、かなり安い酒を頼むと、同時に煙草を啜える。火をつけようとすると、横からライターを持つ腕がのびてくる。ナイツの腕だった。

「おらよ」

「悪い」

ありがたく火をいただき、先端に灯す。

ライターをしまうナイツは、懷から封筒を取り出す。それを、ベレッタの目の前に置いた。

「あんだ、これ」

「レジアスの手下が吐いた情報の報告書だ。お前は機動六課にいつ

から、送られてこなかったんだろうぜ」

「そりゃそうだ」

あの部隊に送られてきたら色々面倒な奴らがいるからな。
送ってこない方がいいと判断したんだろう。

そうベレッタは、ひとり静かに納得しながらついさっき置かれた酒のグラスを掴んで口へと運ぶ。

「どうやらレジアスの野郎、色んな部隊にスパイを送ってるみたいだ」

「マジかそれ」

「ああ。あと、いい知らせがある」

「なんだ？」

「運がいいぜ俺たち。『例の部隊』の事、レジアスはまだ一部しか知らないみたいだぜ」

「本当か？」

「みたいだぜ。それと、あの間抜け野郎は記憶消してレジアスに送り返すみたいだ」

「可哀想に。記憶消されるなんてよ」

と言いながらも、その顔は嬉しそうな顔だった。
余談だが、ナイツが言うにはベレッタは『DS』のようだ。

「……で、そんだけ？」

「ああ、もう一個。あの人が、たまには来ないと動けなくなるぞだつて」

「んじゃ言つとけ。その管理ぐらいできてるって」

ベレッタは金をカウンターに置いておくと、そのまま店を後にした。ナイツは口元に笑みを浮かべながら、残りの酒をじっくり味わっていた。

その帰り道、ベレッタはある事ばかり考えていた。

——お前、なんか知らないか？

知っている、本当は。

なんでティアナがあんな無茶をするのか。

それはベレッタも、ヴァイスも、グロツクも関連していた。

だけど、誰も言いたくない。思い出したくない、そんな出来事だった。

「……ちっ」

煙草をくわえたまま、ベレッタは右腕をおさえながら隊舎へと戻った。

「どこ行つてたんだよ、ベレッタ」

「ヴァイスかよ」

「俺じゃ悪いか」

隊舎に帰つて来て、最初に声をかけてきたのはヴァイスだった。ベレッタにとってはむしろこの方が都合がよかった。下手にはやてやヴィータに出会ったら、何を言われるか分かったもんじゃない。

「どこ行つてたんだ？」

「ちょっとな。お前は？」

「ヘリの整備の帰りだ。……ところで、ベレッタ」

「んだよ」

「……ティアナのミスショットの話、聞いたか？」

今日は何回その話を聞けばいいのだ。そううつんざりしながら、ベレッタは頷く。

「さっき、ティアナの奴、外で勝手に精密射撃の練習してやがった」

「……んで？」

「ホント、そっくりだよな、あいつ。ティーダの野郎に」

「だな、俺も思ったよ」

「……二の舞に、ならなきゃいいけどよ」

「……そうだな」

あんな事、二度とごめんだ。

そう思いながら、ヴァイスと別れて自室へと戻った。

自室に戻ると、ベッドに座りこんで、色々と考えていた。

『あの日』の事。

『例の部隊』の事。

「ティードよお、改めて、お前のせいで俺は運命狂わされちゃったみたいだぜ」

恨み事ではなかった。

ただ、いつもの冗談。

あいつならどう返すだろうか。

——俺に言っなよ、そんな事。

……なんて、いうだろうか。

「……寝るか」

すっかり気が滅入ってしまった。

ベレッタはベッドに転がり、眠りに着く事にした。

「じゃあ、ツーンワンで模擬戦やるよ」

いつもの訓練。

ベレッタも呼ばれており、あくびをしながらなのは話を聞いていたら、ヴィータに足の甲を踏みつけられた。

まずはスターズから、と言う事でベレッタとヴィータ、エリオとキヤロは模擬戦が安全に見れるビルの屋上に向かう。

ビルの屋上からなのはとスバルとティアナの様子を見ていると、フエイトも合流した。

「あ、もう模擬戦始まっちゃった？」

息を切らしながらベレッタ達の方に歩み寄る。

「今はスターズの番」

「本当は、スターズの模擬戦も、私が引きつけるつもりだったんだけど……」

「ここんところ、なのはの訓練密度が濃いからな、そろそろ休ませない」と

「なのは……部屋に戻ってからずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ」

そりゃ、休ませた方がいいかもな。

そう思いながら、ベレッタはドアの方へと向かう。

「どこ行くんだ？」

「いや、もう出番ねえなと」

「バーカ。まだおめえの模擬戦があんだろっが」

「はあ！？俺もやんのかよ！？めんどくせー……」

「アタシが徹底的に打ちのめしてやるよ」

ニヤケ顔でそう言うので、やれやれと言った表情でビルの手すりへと引き返す。

……返り討ちにしてやる、クソガキ。

「っと、クロスシフトだな」

スバルとティアナの二人が使うコンビネーションのことを指して、そうヴィータが言った。

ティアナがクロスファイアーシュートを放ち、幾つもの魔力弾がなのはに飛びかかる。

……が。

「なんか、キレがねーな」

その通りだった。

コントロールはいいのだが、魔力弾があまりにもふにゃふにゃ——不規則だった。

それを見て、ベレッタはヴァイスが言っていた言葉を思い出す。

——さつき、ティアナの奴、外で勝手に精密射撃の練習してやがった。

「（ちつ、よつぽど長い時間やってたんだろ……あのバカ）」

精度も体力もかなり減っているのだろう。

なのにそんな体に鞭打って、あんな事をしている。

そう思うと、ベレッタはいよいよ面倒な事になりそうだ、と溜息をつく。

その不規則な魔力弾を、なのはは避ける。

続いて、直後にウイングロードを展開したスバルがなのはへと突っ込んでいく。

なのはは魔力弾を放ち、それをスバルはもう片方の手で強引に消し飛ばしながら、さらになのはへと接近する。

やがて拳が届く距離まで来ると、スバルはなのはへと拳を下ろす。

それをなのははレイジングハートで受け止め、やがてスバルが弾き飛ばされた。

なんとかウイングロードに着地したスバル……が。

「こらスバル！ダメだよ、そんな危ない機動！」

「すみません！でも、ちゃんと防ぎますから！」

それを見ていたベレッタは、やれやれと言った感じに見つめていた。危なっかしいと言っかなんというか。

なんにしろ、あれはまずい。いくら模擬戦や訓練でバカな事をするベレッタでも、それは分かっていた。

あまりにも危険すぎる。

今回はなのはの訓練用魔力弾だったが、実戦ではもし一個でもスバルの体を貫いていたら……。

「あの世行き、か」

そんな事を思っていると、いつのまにかスバルの拳が、再びなのはのシールドと激突していた。

……あれ。

「ティアナはどこ行つた？」

「あそこだ」

ヴィータが指さした方向に、ティアナはいた。スバルが引いたウイングロードを走っていた。クロスミラージュから、オレンジ色の魔力刃を突出させて、そのままのはへと飛びかかる。

「一撃必殺！でやあああああああ！！」

……嫌な予感がする。

《同感》

相棒と同じ事を考えていたベレッタだったが、その予想は見事に的中してしまった。

「レイジングハート、モードリリース」

《Allight》

ティアナとなのはがぶつかり、激しい爆発が起き、煙が見ている方まで飛んできた。

「なのは……！」

やがて煙が晴れると、そこには片手でティアナの刃を、もう片方の手でスバルの拳を受け止めているなのはの姿が。

「おかしいな、二人とも、どうしちゃったのかな？ 頑張ってるのは分かるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ？」

魔力刃を握っているなのはの手には、血がにじんでいた。だがそんなもの、彼女にとってはどうでもいい事の様で、関係なしに話を進めていた。

「練習の時だけ私の言うこと聞いて、本番でこんな真似してたら……練習の意味、ないじゃない？」

静かに語るなのはのその姿に、二人は脅えていた。ベレッタはそんな姿を見て、再び溜息をつく。

「まあ仕方ねえか……後は反省——」

が、ここでベレッタは言葉を失う。

ティアナが魔力刃を解除、そのままクロスミラージュをなのはの方へと向けたのだ。

「あのバカ、何やってんだ!？」

カートリッジをロードし、ティアナは叫ぶ。

「私は!もう、誰も傷つけないから、失くしたくないから!だから……強くなりたいんです!」

が、それを聞き入れないのは。

やがて、指先に魔力を溜めて、それをティアナへと向ける。

「……少し、頭冷やそうか」

やばい、本気でやばい。

みている全員が、そう思った。

「クロスファイア——」

「うわああああああ!!ファントムブレ——」

「シュート」

「!?!」

なのはの指先から放たれる魔力弾。

それがティアナへと向かっていき、再び激しい爆発が起きる。

「ティアアアアアアア！」

スバルが、力いっぱい叫ぶ。

……しかし、その煙が晴れる。

そこには、深紅の魔法陣が、ティアナを魔力弾から守っていた。

「え……？」

そして、観客席側の方でもちよつとした騒ぎが起きた。

「あのバカ、まさか……！」

ヴィータが、その『バカ』がいた方を見る。
が、既にその姿は無かった。

その『バカ』は今、ティアナの前にいた。

「べ、ベレッタさん……」

「言いたい事はあるけど、まずはあっち行け」

「で、でも……！」

「さっさと行け。正直、目障り以外の何もんでもねえんだよ」

「ッ……！」

「スバル、てめえもだ。バカな相棒連れて医務室なり観客席なり、どっか行け。お前も邪魔だ」

「なっ……」

「さっさと行けって言っただろ、じゃねえとこんなんじゃ済まねえ痛み、味わうことになるぞ」

そう言われ、スバルとティアナは大人しく観客席側へと戻る。残されたベレッタとなのはは、静かに対峙する。

「……まあ、確かに分かるけどよ、なのは」

「何の真似かな……？」

「言っとくけど、多分あんなんじゃあいつらは止まんないぜ？」

レジスタンスを構えるベレッタ。

その銃口の先には、既に魔力弾がスタンバイされていた。

「むしろ、悪化するだろうよ」

「……ベレッタ君も、頭冷やそうか。ちょっと落ち着こ？」

「そりゃこっちの台詞だ。……エリオとキャロの前に、まず俺と模擬戦してもらおうか」

「……じゃあ、始めようか」

ピンク色の閃光と、深紅の閃光が同時に爆発した。

CHAPTER 1 - 8 「Tの決意／迫りくる生物兵器」 (前書き)

ベレッタ

「タイトルがまんまWじゃねえか！」

伝説

「いやあ、なんかかつこいいから使つかゝみたいな？」

ベレッタ

「……」

CHAPTER 1 - 8 「Tの決意／迫りくる生物兵器」

ボーっと、ベレッタは隊舎の手すりから夕陽を眺めていた。
口には煙草をくわえて。

「……あゝあ、何やってんだ、俺」

煙草を指にはさんで、煙を吐く。

あの後、途中でフェイト、ヴィータ、そして何故かやってきたヴァイスにまで止められて模擬戦は中断となった。

ヴァイス如く、『あのまま続けていたら死人が出る』ほどだった。

「くっくだらねえ……あんな事で、なんで出て行っちゃったんだろ、バカか俺は」

再び啜えて、模擬戦の内容を思い出していた。

周りからすれば、なのはが有利だった。

元々空中戦は出来るが、決して得意ではなかった。むしろ、不得意に近い。

エースオブエースの名は、伊達ではない。
それに比べて――。

「シークレットジョーカーこそ、伊達じゃねえか」

一番落ち込んでいるのはそっちだった。

なんだかんだで、シークレット・ジョーカーが気に入っていたベレッタはそれがショックだった。

と、直後、背後に気配がする。

振り向くと、そこにはヴァイスが立っていた。

「んだよ、ヴァイスか」

「どうしたんだ」

「うつせえ」

「怒んなよ」

「黙ってる、喋れなくされたいか？」

「遠慮しとくよ。つか、喋らせろよ」

ヴァイスが溜息をつくとき、手すりから夕日を眺める。

ベレッタは、そのまま手すりにもたれかかった。

「後で、謝つとけよ」

「……ああ」

そのまま座りこんで、ボーっとし始めるベレッタ。

ヴァイスはベレッタの事を何年も知っているが、ここまで脱力した姿を見たのは初めてだった。

よほど疲れたのか、それとも……と色々考えるが、ピンとこない。

「……じゃ、俺へりの整備すつから」

「……ああ」

ダメだこりゃ。

ヴァイスまで脱力して、屋上を後にした。
残ったベレッタは、結局夜までそんな状態だった。

隊舎の中に入ると、丁度のタイミングで会いたくない人に出会った。

「……なのは」

「あ、ベレッタ君……」

気まずい。

が、ここで逃げてはこれから戦う時背中が怖い。
実際なのはそんな人間ではないと思っているが、やはり怖かった。

「……その、悪かったな。あん時」

「うっん、私も……頭に血が昇ってて」

「お前みたいな奴でも、あるんだなそう言う事」

「にやはは……」

驚くくらいあっさり終わった。

相手がなのはだからと言うのもあるだろうが、まさかここまでとは。

「あ、ティアナ達、あれからどうだ？」

「ご機嫌斜めだって……フェイトちゃんが」

そう言った時のなのは顔は、どこか悲しそうだった。

やはり、教え子にああいった事をしたり、されるのは教える側としては悲しい事なのだろう。

ベレッタは、そう思った。

「まあ、明日の朝、ちゃんと話すよ。フォワードのみんなと」

「……そうかい、んならいいさ。ギスギスしたまま戦っても、背中が怖いからな」

「そうだね」

その瞬間だった。

突如、赤いランプが点灯してブザーが鳴った。

二人はすぐさま司令部の方へと向かう。

司令部に着くと、はやてとグリフィスの横に駆け寄る。

「どうした？」

「東部海上に、ガジェットドローン弐型が出現したんや」

「弐型か……」

巨大モニターには、ガジェット弐型の姿が映し出されていた。

「レリックの反応は？」

「現状では……付近に反応はありません」

それを聞いて、ベレッタは疑問を抱いた。

レリックがないのに出現？どういうことだ？
まるで、撃墜しろと誘ってるみたい……そんな状態だ。
それとも、何か別の意味でもあるのか……？

「機体速度が、今までに比べて早くなってます」

「……動作テスト」

「「え？」」

ベレッタの呟いた一言に、はやてとなのはが反応する。

「スカリエッティ、もしくはスパーズのガジェットだとしたら、それをテストするため……ってのは？」

「それも一理あるなあ……。でも、なんでこんな見つかりやすいところ？」

「動作テストを兼ねての、俺たちの高速戦闘データ取得」

「確かに、それもある」

ドアが開き、そこからフェイトが入りながらそう呟いた。

「フェイト……」

「犯人が……ベレッタの言った通り、スカリエッティかスパーズだとしたら、ね」

「まあ、なんにしろそれが狙いなら長距離砲撃を放り込めばいいん

やけどな」

「だからこそ、奥の手は見せない方がいいかなって」

「ほんなら、それでいい」

三人は静かにうなずいた。

だがベレッタは、どうにも腑に落ちなかった。

本当にそれだけ？何かもうひとつ、別の目的もあるんじゃないか。そんな気がした。

クラナガン上空を飛ぶ、青年——ジュンの姿があった。
スパーズと通信で会話をしていた。

「で、俺は海岸に行けばいいんだな？」

『ああ。隊舎の方は既に手を打っている』

そう告げると、スパーズは通信を遮断した。

ジュンは自分の周りに飛ぶガジェット式型を見ながら、手に持っている小型ガトリングのデバイスを肩に担ぎながら見る。

「さーてと、早く来ねえかな……」

強いものと戦える興奮。

その興奮に酔いしれながら、ここへとやってくる『獲物』を待ち構えていた。

隊舎付近にある、小さな森林。

その森林を歩く一つの人影。

だが喋らない。その人影の主はただ静かに歩を進めていた。

「……」

その肌は黒く、人間の肌の色ではなかった。

その両手に持つ、巨大な爪。

露出した心臓部分にある小さなチップの様なものがかすかに光る。

実験体——『ムラサマ』は、静かに隊舎へと向かっていた。

やがて、なのは達がヘリポートに到着すると既にヘリのプロペラも回っており、いつでもOKな状態だった。
そこには副隊長のヴィータとシグナム、フォワード陣も集まっていた。

「今回は空戦だから、出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長とベレッタ陸曹の4人——って、ベレッタ陸曹は？」

「あのバカ……！」

ヴィータがそう言ったと同時に、ベレッタがヘリポートへと現れた。

「悪い、遅れ——」

瞬間に、ベレッタの腹にヴィータの蹴りが炸裂する。

ぐふうという普段のベレッタからは想像できない声が出てくる。

「て、てめえ……謝ってんだろ！」

「うつせえ！罰だ罰！」

「……二人とも、今はその辺で。」

シグナム副隊長と、フォワード陣はロビーで、出動待機ね」

「ちっ……。そっちの指揮はシグナムだ、留守を頼むぞ」

「「はい！」」

「「……はい」」

明らかに、元気がない。

それを見ながらベレッタは静かに溜息をついた。

「あ、それからティアナ。今回は出動待機から外れとこうか」

「……言う事を聞かない奴は、使えないって事ですか？」

ベストな状態でないうえ、あんなだけの事をしたんだ。

これくらい当然のことだろう。

ベレッタは心の中で呟いた。

「現場での指示や行動はちゃんと聞いてます。教導だってちゃんとやってます」

これを聞いて、ヴィータがティアナに近づく。
が、ベレッタは腕を伸ばしてそれを止める。

ヴィータはベレッタの顔を驚いた様子で見えてきて、それをベレッタはとりあえずティアナの顔を見てスルーした。

「私は、なのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キヤロみたいなレアスキルも、ベレッタさんみたいな射撃能力もない。

少しくらい無理して、死ぬ気でやらないと強くなんなれないじゃないですか——」

その直後、シグナムがティアナの襟首を掴む。
そして、シグナムの拳が——。

「！」

「ベレッタ！」

——飛んでこなかった。

ベレッタが間に割り込んで、その拳を受けた。

「いってえ……最後にこれ喰らったのいつだったっけか」

「ベレッタ、貴様何をやっている！」

殴られた時に横にふっ飛ばされていたベレッタは、服に着いた砂を振り払いながらよろよろ立ち上がる。

「気は済んだかよ、ティアナ？」

「えっ？」

「ちなみに言つとくが、お前俺の事買いかぶりすぎだ。俺は射撃能力そんなにないぞ」

「な、何言ってるんですか！」

ベレッタはポケットに手を入れ、ヘリの方へと歩き出す。

「ヴァイス、ヘリ乗れるか！」

「ああ、いつでもOKだ」

「……ティアナ、ひとつ言つとくぞ。お前、本当ならクビだぞ？上官の言つ事に逆らつて、勝手にバカな事やって自滅して。拳句の果てに今度は逆切れ？つまんねえギャグだな、本当に」

「ベレッタ、お前……！」

ヴィータが止めにかかるが、ベレッタは止まらなかった。

「黙ってるヴィータ。とりあえず、話はここまでだ。

こんな所でうだうだ話しても、時間の無駄だ。どうかで被害が出るかもしれないしな」

「ッ……」

そうして、ベレッタはヘリの入って、後続くようにヴィータ、なのは、フェイトも中へと入った。
全員が入ると、そのままヘリが動きだし、出撃した。

「ベレッタ」

「ああ？」

ヘリの中で、ヴィータが話しかけてきた。
不機嫌なベレッタに加えて、さっきの事件もあったので、ヘリの中の空気は重苦しく、誰も話してなかった。

「お前、大丈夫かよ？」

「……ああ、シグナムの奴、そんなに力入れてなかったみたいだしな」

「そうだったのか」

「ってか、お前が俺の事を心配するのか。今日は雨かなんか降るのか？」

「うつせえ！黙ってるタコ！」

「お前が黙れチビ」

そうこうしてるうちに、ヘリはやがて海上に到着していた。
まずフェイト、ヴィータ、ベレッタの三人がガジェットの群れの中

へと突撃する。

ヘリから降りてデバイスを起動し、三人は群れへ進軍する。

「……おい、ちょっと待て」

「なんだよ？」

ベレッタはある事に気がつく。

「……魔力反応だ。あの中に、魔導師がいる」

「そんな。だって、そんな情報——」

その瞬間。

魔力弾の嵐が、三人に襲いかかる。

それぞれその魔力弾を回避し、その撃ってきた方向——ガジェット
の群れを見据える。

今のはガジェットの魔力弾ではない。確実に、射撃魔法だった。

「レジスタンス、どこにいる!？」

《……エリアサーチに引つかからない。強力なステルス機能持つて
るとしか考えられないわ》

「くそ、とりあえずあの中に行くしかねえ!行くぞ、フェイト、ヴ
イータ!」

「……なんであいつが仕切ってたんだ」

「まあまあ。こういう戦闘は、実際ベレッタの方が数も踏んでるし、

「実力もあるし」

「気に入らねえ……」

文句を言いながら、ヴィータとフェイトは先行したベレッタの後に続いた。

「お、来た来た。行くぜ、『デューティー』」

《はい、マスター》

ガトリングを構えたジュンはカートリッジをロード。

1秒に50発の魔力弾を発射する射撃魔法『インペリアルショット』を再び放つ。

が、それはベレッタの『アサルトバレット』、フェイトの『ハーケンセイバー』によって消し去られる。

全て消されたわけではないが、それでも三人にダメージを負わせる事は出来なかった。

「まあ、これぐらいじゃねえと面白くねえか」

ベレッタ達は周りのガジェットを撃墜させながら、ジュンの所へとたどり着いた。

「てめえ、スカリエッティの回した奴か？それとも、スパーズの？」

「スパーズ……って言った方が正しいか」

見た目は、高校生ぐらいの青年だった。

だが、彼から感じる強力な魔力。

正直、ベレッタは自分の魔力より大きいと感じた。

「……フェイト、ヴィータ。こいつは俺がやる。お前らは、周りのガジェットを」

「バカ、てめえ死ぬかもしれないぞ!？」

「じゃあ死にそうになったら助けに来てくれ。まだ死にたくねえし」

いつもの人をバカにしたような態度。

ヴィータはそれにいらついたが、我慢してフェイトと共にガジェットの破壊へと繰り出す。

残された二人は互いを見据える。

「……で、どうすんの？やるの、やんないの？」

「年上に対する敬意っつーもん、ママから教わんなかったか？」

「ママもパパもいたかどうか忘れたよ」

「そいつは悪い」

「気にすんなよ」

ははは、と同時にから笑い。

そして、同時に空中でステップを踏み、互いの武器から魔力弾を撃

っ。

それが魔力弾同士がぶつかり、相殺される。

「はあああああああああ！！」

「おらあああああああああ！！」

死闘は続いた。

同じころ、隊舎では軽いパニックが起きていた。
そして海上にいたレーダーに映らなかった魔導師。
司令室では、その対応について追われていた。

「エリアサーチャーにも引つかからないなんて……どうして？」

「強力なステルス機能、もしくは端末による操作……なんにしろ、
危険な相手なのは事実や」

「ベレッタ陸曹、大丈夫でしょうか——！！ や、八神部隊長！こ
れを見てください！」

突如声を荒げたオペレーターのルキノ・リリエは、大画面にある映像を映し出す。

その映像は、六課周辺の映像だったが、様子が違う。

「なっ、これって……！」

実験体——生物兵器と名づけられた怪物。
ムラサマの姿だった。

「まさか、こんな時に……」

「いや、これを狙ってたんや。迂闊やった……！」

はやては自らの判断ミスに苛立ちを覚えるが、素早く切り替える。

「シグナム副隊長、ティアナを除いたフォワード陣はすぐさま迎撃に向かわせて！」

「了解！」

海上では、二人の死闘が続いていた。

ベレッタが息を整えていると、念話が聞こえてきた。

ザーッという音が聞こえた直後、はやての荒げた声が聞こえる。

『なのは隊長、フェイト隊長、ヴィータ副隊長、ベレッタ陸曹、緊

急事態や！生物兵器が現れよった！』

「んだと！？」

「ああ、どうした？トイレか？」

「そりゃそつちだろうが」

適当に流しながら、念話を聞き続ける。

『今、シグナム副隊長とフォワード陣が足止めしとる。ガジェットを撃墜後、急いで隊舎へ——』

「くそつ、てめえ！生物兵器を隊舎に送るなら送るつて言え！」

銃を構えながら、ジュンへと叫ぶ。
が、ジュンは新鮮な驚きとともに、怒りを露わにする。

「はあ！？何の話だよ、知らねえ！」

「ざけんな、てめえらのボスの仕業だろうが！」

「知らねえよ、俺は——！」

ガトリングを再び発射してきた。
ベレッタはレジスタンスのカートリッジをロードした後、手から魔力弾を形成し、それを投げつける。

「チャフグレネーダー！」

爆発したと同時に、ガトリングから発射された無数の魔力弾は消え去っていく。

チャフグレネーダーは魔力弾や誘導弾をカットしたり消去する事が出来る能力がある。

「くそ、てめえ汚ねえ事——！！？」

ジューンは驚きを隠せなかった。

ベレッタの周りには、無数の魔力弾がスタンバイしていた。

それは、フェイトの『フォトンランサー・フランクスシフト』に似ていた。

ベレッタはカートリッジを5発ロードし、マガジンを腰のホルダーから取り出し、切り替える。

「時間がねえんだ、さっさと終いにしてやるよ——！！」

「ちっ、ふざけやがって——！！」

「フィニッシュだ、クソ野郎——！！」

《Barret Pod》

「ファイアッ——！！」

無数の魔力弾が、一斉にジューンへと向かって放たれる。

ジューンも魔力弾を発射して消し去ろうとしたが、チャフの効果がま

だ残っていた。

「やべっ、マジかよ……！」

流石に覚悟を決めた。

が。

「!？」

ベレッタの前を、何かが横切る。

それはジユンを乗せて、ベレッタの反対側へと向かう。

「おいおい、ありがよそれ？」

「スパーズの刺し金だろ、まあ感謝すつけど」

バレットポッドは誘導弾ではないため、追跡はできない。

ベレッタは飛んで行った魔力弾をキャンセルし、ジユンを見据える。
ジユンを乗せている羽の生えた鳥——むしろこうもりに見えた怪物
も、同じくベレッタを睨みつけていた。

「……まあ、今回はここまでだ。『次』、楽しみにしとけ」

「……」

「あばよ、シークレット・ジョーカーさんよ」

そのまま、転移魔法でその場から消えた。

その直後に、なのは、フェイト、ヴィータはベレッタの元へと集う。

「大丈夫、ベレッタ？」

「嫁出来るまで死ぬ気はねえよ」

「一生出来ねえよ」

「んだとクソガキ!？」

「黙れニコ中!!」

「こら。二人とも、今そんな事言ってる場合じゃないでしょ」

なのはが間に入り、二人の喧嘩を止める。

「とにかく、急いで隊舎に戻ろう。例の生物兵器を倒さないと」

落ち着いた様子でフェイトが言う。

他の全員が頷くと、すぐさまヘリへと引き返し、隊舎へ戻った。

ベレッタ達がヘリポートから飛び立った直後、スバルはシグナムに向かってこういった。

——め、命令違反とかはやっぱ駄目だし、それを止められなかった私も駄目だったと思います。

でも、強くなりたいとか……きつい状態を何とかしたいとか…

…。

その為に頑張るのって、そんなにいけないことなんでしょうか！？

うつすら涙を浮かべながら、そう言った。

シグナムは何かを言おうとした。だが、その瞬間に生物兵器が現れ、今こうして隊舎の前で生物兵器の出現を待っている。

横には、スバルとエリオとキャロの姿があり、ティアナは隊舎内にいる。

はやての話によれば、ベレッタの到着はまだ時間がかかる。自分たちで、ここを守らなければならない。

だが相手は戦った事の無い未知の生物。

唯一経験のあるベレッタでもいればまだ分からなかったが。

「……無いものに頼っても仕方ないか」

1人、静かに呟きながら手に持つ得物——レヴァンティンを構える。森林の中から、その生物兵器——ムラサマが現れたからだった。

「スバル、エリオと私は奴へ接近戦で。キャロは後方で支援してくれ」

「……はい！」

「……行くぞ」

三人はムラサマへと駆け寄る。

レヴァンティンが届く位置まで来ると、シグナムはそれを振り下ろす。

見た目は人間の生物兵器、おまけにスピードは遅い。

——当たる。

そう確信した。だが。

「なに！？」

レヴァンティンを軽々しく受け止め、それごとムラサマはシグナムもろとも吹き飛ばす。

スバルとエリオが巻き込まれ、地面へと叩きつけられた。

「くそっ……！」

あちこちすりむいたが、気にしてはいられない。

「レヴァンティン！」

《Ja!》

カートリッジをロードし、シュランゲフォーム——蛇腹剣へと変化させると、刃をムラサマめがけて飛ばす。

だがそれも避けられ、ムラサマの手から魔力弾が形成される。

「！」

それを投げ込まれるが、スバルの間一髪のプロテクションにより、守る事は出来た。

だが煙が晴れた瞬間、これまで動きののろかったムラサマが突如として動きが敏感になり、高速で接近してくる。

エリオが間に入って弾こうとするが、無駄だった。そのままエリオもろとも吹き飛ばされ、再び元の場所へと戻される。

「くそ、ダメだ……」

「せめて遠距離から攻撃ができれば……！」

「ティア……」

現在出撃してない相棒の名を呼ぶスバル。

が、もしティアナを連れてくれば命令違反。どうなるものか分かったものではない。

「……ベレッタ、なのは、早く来い……！！」

目の前のムラサマが再び接近してくる。

次飛ばされれば隊舎内への侵入を許してしまう。
だがあの様子では、どんな魔法も効きはしない。

しかし、シグナムが舌打ちをした、その瞬間だった。

「！？」

突如として、ムラサマの足元に魔力弾が飛んでくる。

「なんだ！？」

辺りを見渡すと、少し離れた横にメダルオナーを構えた、ナイトの姿があった。

だがそこにいる4人は、ナイトのことを知らなかった。

ナイツはとりあえず魔力弾を散らしながらシグナム達へと接近する。
やがて普通に話しが出来る距離まで来ると、

「無限書庫のナイツ・アーマメントです。ベレッタから聞いて、援軍に着ました」

「ベレッタが……?」

まさか、こうなる事態を予測していた?
ならどうして言わなかったとシグナムは心の中で怒るがそれは後。

「一応、あいづらとは何度がやりあったんで。助太刀しますよ」

「……頼む」

「了解です」

ナイツはメダルオーナーを構えて、ムラサマと対峙する。

「さあ来いよ、こっちは準備万端だ!」

「!」

そして、ムラサマはそのまま走って接近してきた。

CHAPTER 1 - 9 「Tの決意／第二ラウンド開幕」

実戦経験が、決して豊富なわけではない。

ナイツは元々後方支援。前線でバンバン撃ちまくるベレッタとは違いサポートが主な仕事だ。

だがそんな事を考えなかった、と言うより気にしなかったベレッタはナイツは今非常に憎かった。

突然呼ばれたのはいいが、まさかこういう事になっていたとはナイツは考えもしなかった。

「つくそ、恨むぞベレッタ……」

舌打ちしながら、魔力弾をムラマサに討ち続ける。

が、まったくひるむ様子がなかった。

どれだけ堅いんだ、こいつ……。

「シグナム副隊長、ベレッタ達はまだなんですか？」

「八神部隊長の話によると、もう少しでこちらに戻ってくるようだ

……！」

少し。

その少しがどれくらいか分からないが、ナイツには其の少しを保つ自信がなかった。

確実にヤバイ。これは本当にヤバイ。

「早く帰って来いよ、ベレッタアツ……！」

ティアナは慌ただしい隊舎の廊下をうろつろしていた。
外では魔力弾の音が聞こえる。

しかし、自分が出る事が出来ない。共に闘うことはできない。
ただ外で指をくわえて見ているだけ。それだけだった。

「……」

何故、どうして。

自分は戦えないんだ。

この思考だけが脳内を支配していた。

自分には才能がないから、訓練しなければ強くななんてなれない。

「……」

それをどうして否定するんだ。

自分は今も、何もしてはいけないのか。

「……兄さん」

兄との約束は、守れないのか――。

「ベレッタ」

「ああ？」

さつきから足をばたつかせてご機嫌が余りよろしくないベレッタに、ヴィータは声をかけた。

反応も悪く、場の空気が少し重くなるがヴィータは会話を続行させる。

「帰ったら、ちゃんとティアナに何か言えよ」

「お説教でもしろってか？」

「そんなんじゃない。そいつはアタシらの仕事だ。オメーは先輩として何か言えつつってんだ」

……何言えばいいんだよ。

溜息交じりに言う。

そこで、フェイトも会話に入ってきた。

「きつと、ティアナは思いつめてるから。ベレッタが何か言っただけ、話を聞いてあげれば少しは直ると思うよ」

「だからなんで俺なんだよ」

「ほら、二人とも銃使いだし」

……それだけ。

それだけの共通点で何を話すればいいんだ。

しばらく考え込む。

やがて、一個だけ思い浮かんだ。
だが。

「……やめとこ」

「何か思いついたのかよ？」

「思いついたけど、余計に追い詰めそうだからやめとくわ。つーかな、お前らが何か言うだけで充分だろ。」

俺に何か言えって言っても、せいぜい言えるのは煙草の吸い方と美味しい酒の飲み方と女の抱き方ぐれーだよ」

「……お前、サイテーだな」

「よく言われる事だよ」

「でも、ベレッタ君っぽい」

「どついう意味だよ……。つーかなのは、意味分かってんのかよ……」

頭を抱えるが、まあきつと本当に単純な意味でしか分からないだろう。ヴィータを除いて。

……と言うより、何故ヴィータがあの意味が分かったのだろうか。ますます頭を抱えていると、やがてヴァイスの声が。

「話はそこまでだ。隊舎近くで下ろすから、よろしく頼むぜ！」

四人は黙ってうなずいた。

気がつけば、ティアナは指令室の前にいた。

「たまたま、と言えはいいのか。」

「入りたいが、今の自分は本当に入ってもいいのだろうか。」

「ドアの前でしばらく立ち止まっていたが、突如ドアが開いてティアナは驚いた。」

「ドアから出てきたのは、はやてだった。」

「ティアナ、どうしたやこんなところで」

「い、いえ、その……」

「ちょうどよかった。ティアナに話したい事があるんや」

「話したい、事……？」

数分後、彼女は戦いが行われている隊舎の入口へと走って行った。

「んじゃ、とつとと終わらせるか!!」

ヘリのハッチから、四人は飛び降りた。

隊舎の入口前に着地すると、生物兵器と戦っていたシグナム達が、一斉にベレッタ達に顔を向けた。

「おせえんだよ、ベレッタ！」

「ちょっとバカな野郎に付き合ってたんだよ」

レジスタンスを、ムラマサの方へと向ける。

現在、動きは停止しているが再び動き出すだろう。

「……あいつか、生物兵器は」

「ああ。ボディはかなり堅い」

シグナムがそう言うと、その横にヴィータが立つ。

「んじゃ、叩き潰せばいいんだろ」

「そう簡単に行けば、苦労してませんよヴィータ副隊長さん」

そう言うナイツだったが、顔は余裕そうな表情だった。

ベレッタ達が来たと言う安心からだった。

「隊長陣がこんだけいるんだ、どうにでもなんだろ！」

ベレッタがそう叫ぶと、ムラマサは再びこちらに駆け出して来た。なのはのアクセルシューターが、その直後に放たれる。が、当然のごとくそのボディに消し飛ばされた。

「やっぱり、堅い……」

「大出力で吹っ飛ばすか!？」

「こんな所で使ったら、隊舎に被害が及ぶ可能性があるから……」

とにかく動きを止めようと、魔力弾をベレッタ達が放つ。

動きは遅くなるが、やはり完全に止める事は出来なかった。

やがて、グレネードバレットを放ち、爆発が起きる。

「どうだ……?」

煙が晴れるが、やはりそこには傷一つないムラマサの姿が。

「どうすればいいですか、あんな奴……」

「……!」

ベレッタは、ある事に気がついた。

すぐさまブラックオプスを手にムラマサへと接近する。

「お、おいベレッタ!」

ナイフを頭へと投げつける。

当然、ナイフが刺さるわけがなくその固いボディによってナイフは音を立てて地面へと落ちた。

だがそれによって、ムラマサは少しひるんだ。

ベレッタは地を蹴り、空中へと飛んでムラマサの背後へと接近する。

背後には、大きな心臓の様な臓器が露出していた。

「背中を見せなかったのは、この為か……!」

銃を発射しようとしたが、ムラマサのその驚異的ジャンプによって背中を心臓を狙う事は出来なかった。

ベレッタの背後とは少し離れたところに着地して、制止した。

「……なのは！ティアナ呼べ！そうすれば勝てる！！」

「でも、ティアナは……」

「今すぐここで誰も守れずに死ぬか！？」

その言葉を聞いて、黙りこむのは。
やがて、はやてに交信を始めた。

「八神部隊長。ティアナはどこにいますか？」

『心配あらへん。もうすぐそこへ行くはずや』

「え？」

その直後、入口からバリアジャケット姿のティアナが走って来た。

「ティ、ティア……？」

スバルが息を整えるティアナを見ながら呟く。

やがてティアナは顔を上げて、なのはを見据えて口を開いた。

「無理を承知でお願いします！高町分隊長！自分も、出撃させてください！」

「ティアナ……」

「聞きました。八神部隊長からなのはさんの事……」

「え？」

「……この度の不祥事、誠に申し訳ありませんでした」

頭を下げ、謝罪の言葉を口にするティアナ。

何がどうなっているのか、なのはによく分からなかった。

「……話は、後でゆっくりね。今はあいつを倒そう」

「はい！」

「その前に、ちょっとクロスミラージュ貸して」

言われるがまま、ティアナはなのはにクロスミラージュを手渡す。

「リミットリリース。クロスミラージュ、モードツー」

その瞬間、銃口側とグリップ側から魔力刃が現れた。

模擬戦時にティアナが使用していた魔力刃とは少し形が違っていた。

「え？」

「ティアナが執務官として単独行動が必要になると思ってたから、最初からこの形態は用意してたんだ」

「そう、だったんですか……」

「私たちも、この事を先に言っていればよかったね。その事は、ちゃんと謝るよ。」

……だけど、まだティアナも、フォワードのみんなも、才能はあったてもそれを上手く使う方法を知らないから。

強くなるのは凄くいい事だけど、それで無理をしてたら元も子もないから」

「はいはいはい、空気読めなくて悪いけど後にしな」

「本当に空気読めてねえなあ、おい……」

ヴィータが苦笑いでベレッタのその言葉を静かに突っ込む。
なのはとティアナは互いに頷き合つと、戦闘体制に入る。

「さあ、第二ラウンド始めようぜ!」

ムラマサは、再びこちらへと急速に距離を縮めてきた。

CHAPTER 1 - 9 「Tの決意／第二ラウンド開幕」(後書き)

NEXT CHAPTER 1 - F 「終わりと始まりの序曲」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7409t/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS -Chronicle of Century-

2011年11月13日05時54分発行